

流山市若宮第II遺跡

— 都市計画道路 3・3・2号線（新川南流山線）埋蔵文化財調査報告書 —

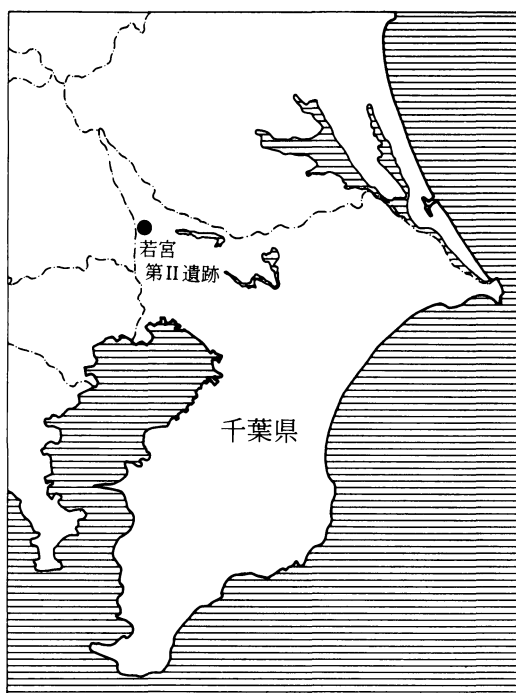
平成 9 年 3 月

千 葉 県 都 市 部

財団法人 千葉県文化財センター

ながれ やま わか みや
流山市若宮第II遺跡

— 都市計画道路 3・3・2号線（新川南流山線）埋蔵文化財調査報告書 —



序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第296集として、千葉県の都市計画道路3・3・2号線（新川南流山線）建設事業に伴って実施した流山市若宮第II遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、旧石器時代から江戸時代に至る様々な遺構と遺物が発見され、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。この報告書が、学術資料として、また教育資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成9年3月31日

財団法人千葉県文化財センター
理事長 中村好成

凡 例

- 1 本書は、千葉県による都市計画道路3・3・2号線（新川・南流山線）及び都市計画道路3・5・14号線（流山・柏線）の建設に伴う埋蔵文化財調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県流山市加531ほかに所在する若宮第II遺跡（遺跡コード220-014）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県都市部の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者、実施期間は、本文中に記載した。
- 5 本文の執筆は、技師 糸原清が行った。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、千葉県都市部、流山市教育委員会の御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
 - 第1図 国土地理院発行 1/25,000地形図「流山」
 - 第2図 参謀本部陸軍部測量局 1/20,000第一軍管地方迅速図「流山村」「我孫子宿」
 - 第3図 流山市役所発行 1/2,500「流山都市計画図14」
- 8 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。
- 9 本書で呼称した遺構番号は、編集の都合上、調査時の番号と一部異なる。

本文目次

I	はじめに	1
1	調査に至る経緯と経過	1
2	遺跡の位置と歴史的環境	4
3	層序	6
II	検出した遺構と遺物	11
1	調査区の概要	11
2	旧石器時代	11
3	縄文時代	12
(1)	北側調査区	12
(2)	南側調査区	17
4	歴史時代	17
(1)	北側調査区	17
(2)	南側調査区	18
III	まとめ	32
	報告書抄録	巻末

挿図目次

第1図	遺跡位置図(1)	2	第16図	S K 1 土器	19
第2図	遺跡位置図(2)	3	第17図	南側調査区遺構配置図(1)	20
第3図	周辺地形図	5	第18図	南側調査区遺構配置図(2)	22
第4図	土層柱状図	6	第19図	南側調査区土坑(1)	23
第5図	北側調査区全測図	9	第20図	南側調査区土坑(2)	24
第6図	南側調査区全測図	10	第21図	南側調査区土坑(3)	25
第7図	第1ブロック遺物分布図	11	第22図	S K 11 土器	26
第8図	第1ブロック石器	12	第23図	S K 12 石製品	26
第9図	縄文土器(1)	13	第24図	南側調査区溝状遺構	27
第10図	縄文土器(2)	14	第25図	S D 2 土器・陶器	28
第11図	縄文土器(3)	15	第26図	S D 2 石製品	29
第12図	縄文時代石器	16	第27図	S D 3 土器・陶器	29
第13図	陥穴	17	第28図	S D 2、6 銭貨	30
第14図	北側調査区溝状遺構	18	第29図	塚	31
第15図	北側調査区土坑	19	第30図	流山市内の小金牧周辺図	34

表 目 次

第1表	グリッド新旧対照表	8	第2表	銭貨計測表	30
-----	-----------	---	-----	-------	----

図 版 目 次

図版1	調査風景	図版9	第1ブロック石器、縄文時代石器
図版2	土層断面、第1ブロック、縄文土器出土集 中地点	図版10	縄文土器(1)
図版3	SK14、SD1、SD3～5	図版11	縄文土器(2)
図版4	SD3、6、2	図版12	縄文土器(3)、縄文時代土製品・石器、 SD2・6銭貨
図版5	SK1、2、4、6	図版13	SK1・SD3土器・陶磁器、SD3陶器、 SK11土器
図版6	SK8、10、12、16、17	図版14	SD2土器・陶器
図版7	南側調査区南東部分の土坑群、調査風景		
図版8	塚		

I はじめに

1 調査に至る経緯と経過

千葉県都市部は当地域の道路網の整備を目的として、都市計画道路3・3・2号線（新川・南流山線）事業と都市計画道路3・5・14号線（流山・柏線）事業を計画した。事業地区の埋蔵文化財の取扱いについて関係機関が協議した結果、記録保存の措置を講じることとなり、前者については平成2年8月から、後者については平成3年8月から財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施することとなった。

都市計画道路3・3・2号線（新川・南流山線）事業の発掘調査は平成2年8月から平成8年2月まで行った。若宮第II遺跡の対象面積4,578.2㎡のうち、平成2年度は事業地区のうちの3,440㎡について、上層確認調査344㎡、下層確認調査157㎡、上層本調査600㎡を実施した。平成3年度は事業地区の北端と南端の残された範囲と中央部分を合わせた928㎡について、下層確認調査41㎡、上層本調査928㎡と塚1基の調査を実施した。平成7年度は事業地区の中央部分の残された範囲の210.2㎡について、下層確認調査8㎡、上層本調査210.2㎡を実施した。

都市計画道路3・5・14号線（流山・柏線）事業の発掘調査は平成3年8月に若宮第II遺跡の対象面積700㎡について、下層確認調査28㎡、上層本調査700㎡を実施した。

発掘調査の担当者と実施期間は、以下のとおりである。

平成2年度 調査部長堀部昭夫、部長補佐阪田正一、班長上野純司、主任技師渡辺修一

新川・南流山線 若宮第II遺跡 平成2年8月1日～10月31日

平成3年度 調査部長天野努、部長補佐佐久間豊、班長上野純司、技師落合章雄

新川・南流山線 若宮第II遺跡 平成3年7月1日～7月31日

柏・流山線 若宮第II遺跡 平成3年8月1日～8月28日

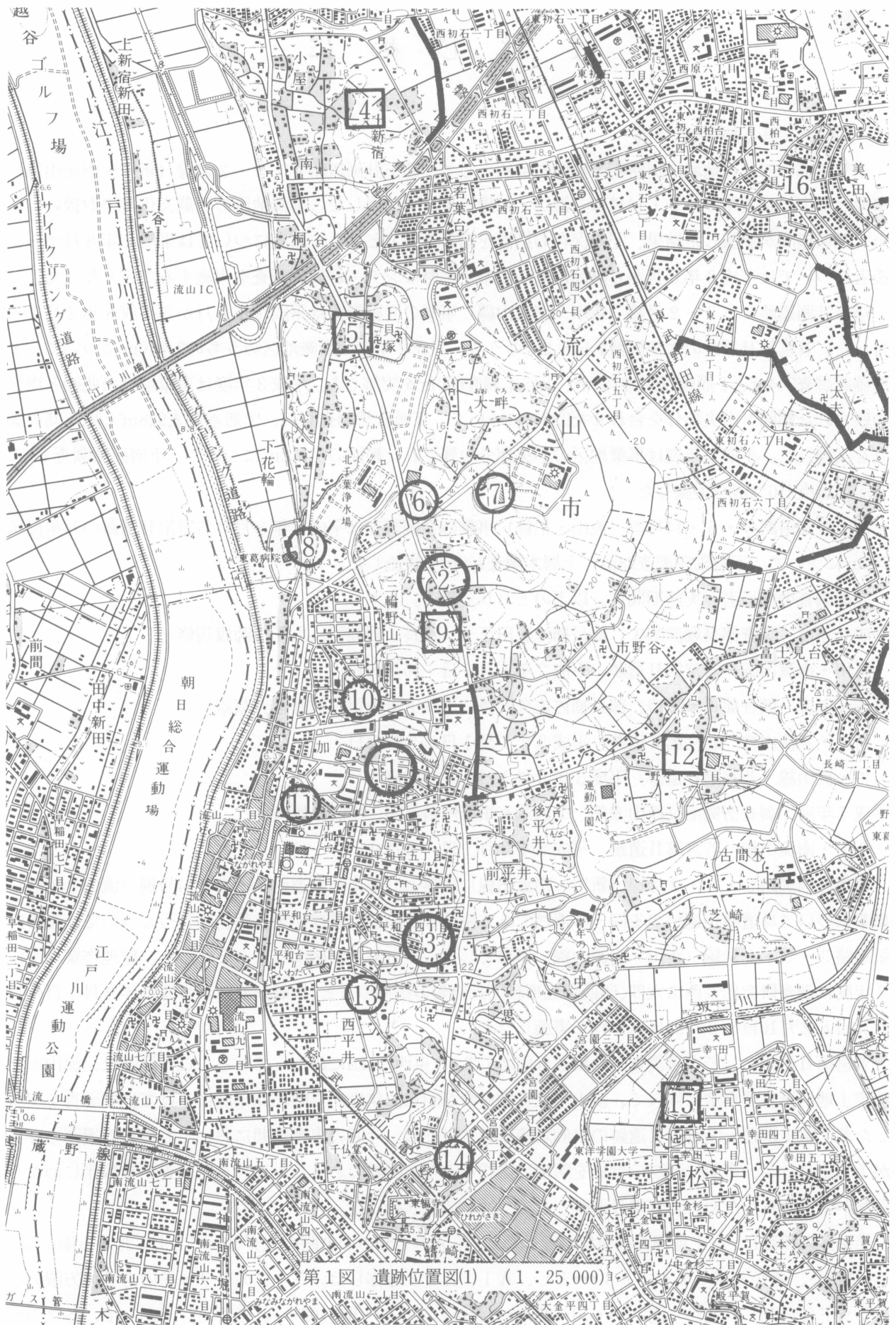
平成7年度 調査研究部長西山太郎、印西調査事務所長谷匂、技師糸原清

新川・南流山線 若宮第II遺跡 平成8年2月1日～2月9日

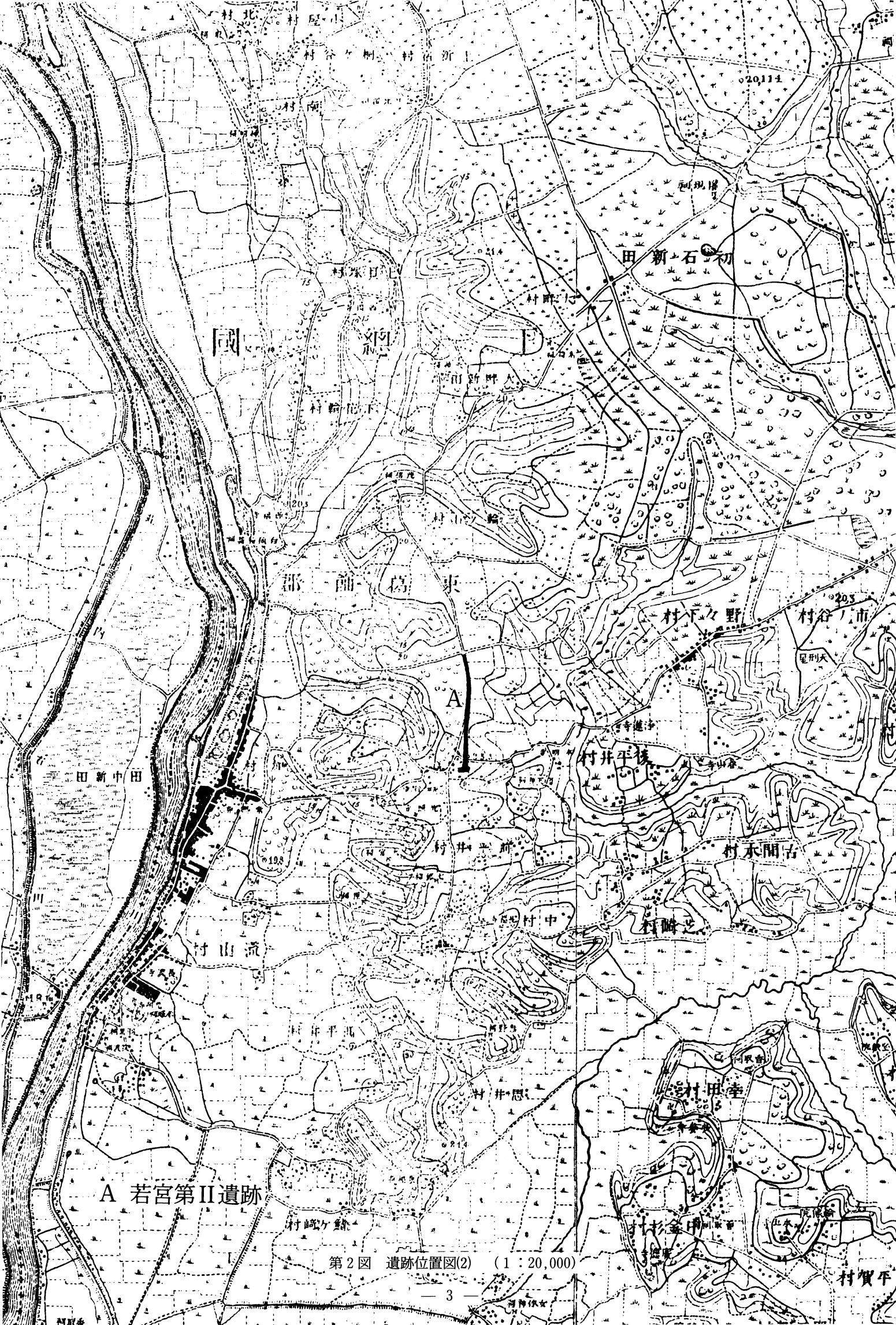
都市計画道路3・3・2号線（新川・南流山線）事業と、都市計画道路3・5・14号線（流山・柏線）事業については遺構が連続する同一の遺跡であり協議した結果、整理作業と報告書刊行については都市計画道路3・3・2号線（新川・南流山線）事業として、まとめて実施することとなった。整理作業は平成7年度に調査研究部長西山太郎、印西調査事務所長谷匂の指導のもと、技師糸原清が平成7年9月1日～11月30日と2月10日～2月29日にかけて実施した。

若宮第II遺跡として今回調査した範囲は南北5.2km、東西1.4kmにわたっている。この範囲は、流山市加特定土地区画整理事業に伴って、流山市教育委員会が昭和56年度から昭和58年度にかけて発掘調査を実施した若宮第I遺跡と若宮第II遺跡の東側隣接区域に当たる。今回の事業範囲においても複数の遺跡の存在が予想されたが、事前に遺跡の境界を明瞭に区切ることが困難であったため、また調査が複数年にわたり混乱が予想されたため、若宮第II遺跡として一括して取り扱った。

発掘区の設定は、国土地理院国家座標を基準とし、50m×50mの方眼の大グリッドとし、北から南へA・B・C…、西から東へ1・2・3…とし、A1、A2と呼称した。さらに大グリッド内を5m方眼の小グリッドに分割し、北から南へ00・10・20…、西から東へ00・01・02…とした。したがって、各々の小



第1図 遺跡位置図(1) (1:25,000)



A 若宮第II遺跡

第2図 遺跡位置図(2) (1 : 20,000)

グリッドはB 3-90、K 2-28のようになる。ただし、調査年次によって発掘区の設定に多少のズレが生じてしまったため、調査時点の旧グリッド呼称と報告書で使用した新グリッド呼称の対照表（第1表）を参照していただきたい。

上層の確認調査は調査区に沿って、幅2mのトレンチを10%の割合で設定した。上層の本調査は、遺構を検出したトレンチを重機により拡張し実施した。下層の確認調査は2m×2mグリッドを4%設定し実施した。遺物の取上げについては、遺構内の通し番号で、包含層や旧石器時代の遺物については小グリッド内の通し番号で行った。なお、遺構番号の呼称について、報告書作成に伴い、統一した呼称を使用した。

2 遺跡の位置と歴史的環境

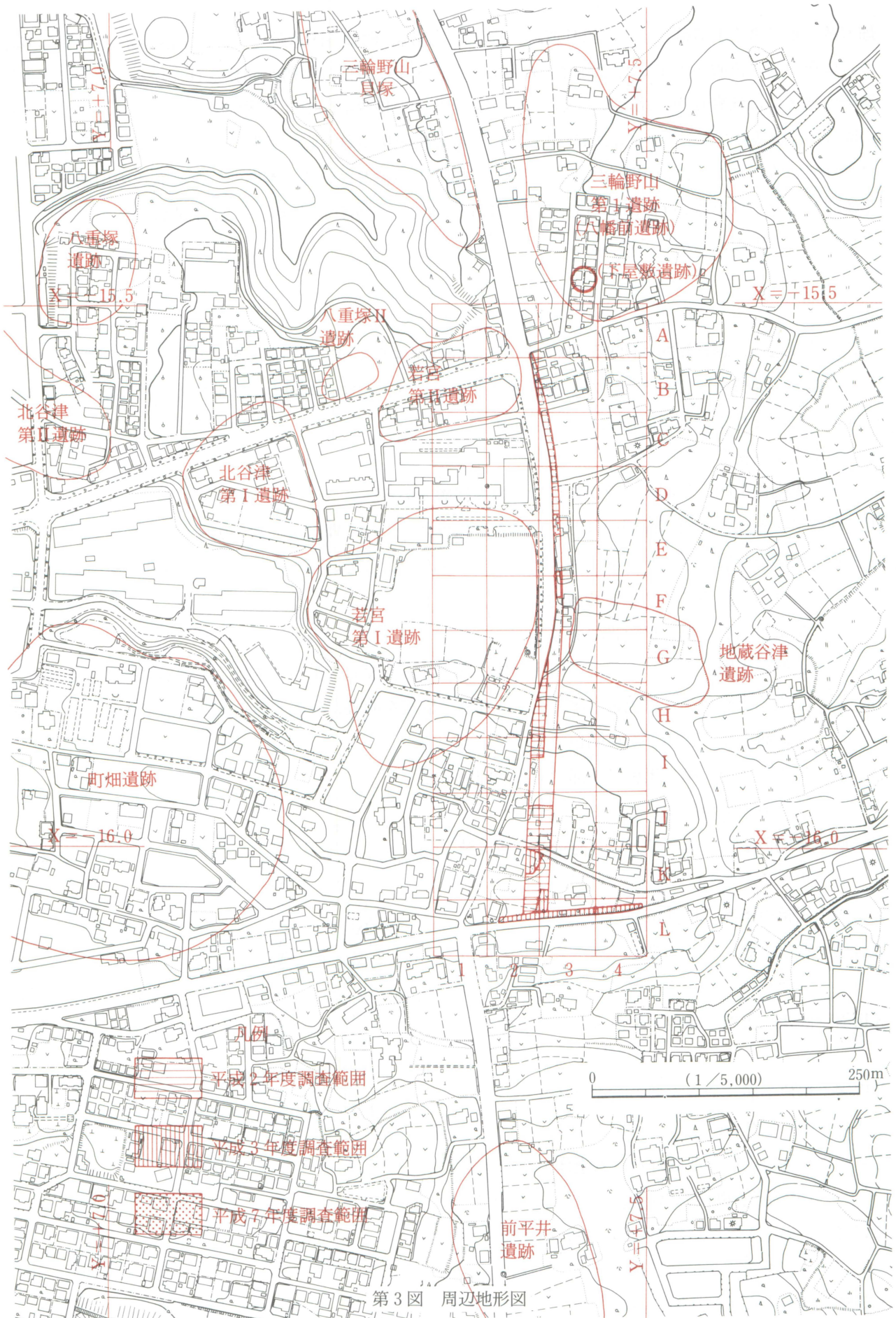
若宮第II遺跡は江戸川左岸の標高約19m～22mの洪積台地上に位置している。現在、流山付近で川幅600mを有する江戸川は、関宿町の北で利根川から分流し、千葉県と埼玉県及び東京都の境を南下して東京湾に流入する河川であるが、これは江戸幕府による利根川東遷事業によって大規模に変えられた姿である。それ以前は、野田市周辺より下流には、渡良瀬川の水を受けた太日河と呼ばれる河川が流れていた。

中世以前は太日河、近世以降は江戸川の左岸台地である本台地は、浸食による開析谷の発達著しく、比高差の大きい支谷が樹枝状に複雑に伸びた地形である。調査区の北端と南端付近にはそれぞれ北東方向からの支谷が入っており、東には江戸川の支流坂川の支谷が南北方向に延びている。こうした三方向からの谷に画された小台地の東側部分に調査区は位置している。調査区西側に若宮第I遺跡、江戸川に面した台地先端部に北谷津第II遺跡や三輪野山八重塚遺跡などが、東側には坂川の支谷に面して地藏谷津遺跡が所在するなど、調査区と隣接して多くの遺跡が分布している。これら周辺遺跡の多くについて、近年の大規模な宅地開発に伴い広範囲な発掘調査が進められている。若宮第I遺跡や北谷津第I遺跡などは、南側の谷向かいの町畑遺跡などと共に加地区遺跡群¹⁾として、流山市教育委員会により大規模な発掘調査が実施された。調査区の北端に接する若宮第II遺跡についても調査が実施され、縄文時代早期の炉穴などが発見されている。また、加地区遺跡群の北の谷向かいの三輪野山遺跡群²⁾についても、また加地区遺跡群の南側に位置する平和台遺跡群³⁾についても大規模な発掘調査が進められている。

調査区周辺の加地区遺跡群では縄文時代早・前期、古墳時代後期から平安時代、そして中近世を中心とした遺構群が発見されている。加地区遺跡群を中心とした周辺遺跡について、以下時代順に概観する。

旧石器時代では、三輪野山第II遺跡⁴⁾から第二黒色帯上部の4つの文化層の石器群が発見されている。縄文時代の早期では、条痕文期の炉穴群が発見された町畑遺跡や北谷津第II遺跡、鶺鴒ヶ島台期の集落が発見された三輪野山第III遺跡⁵⁾などがある。前期後半の遺跡数は増大し、三輪野山第II遺跡、町畑遺跡、北谷津第II遺跡などから黒浜式期の住居跡などが発見されている。また、調査区北側に隣接する下屋敷遺跡⁶⁾からは、興津式期の竪穴住居跡が発見されている。中期の遺跡の分布は少なく、後期から晩期にかけては三輪野山貝塚が所在する。弥生時代の遺跡の分布は稀薄ながら、加村台遺跡⁷⁾から宮ノ台式期の住居跡が発見されている。また、三輪野山第II遺跡からは須和田式の土器片も発見されている。

古墳時代は再び遺跡数が増加する。三輪野山第II遺跡と三輪野山第III遺跡から前期から中期の集落が、三輪野山第II遺跡と茂呂神社脇遺跡⁸⁾、三輪野山八重塚遺跡⁹⁾、町畑遺跡から後期の集落が発見されている。一方、古墳の分布は顕著ではないものの、前期方墳の三輪野山向原古墳¹⁰⁾や後期前方後円墳の三本松古墳¹¹⁾、終末期方墳の北谷津古墳が本台地上の端部に点在している。奈良・平安時代では、三輪野山第II遺跡、町



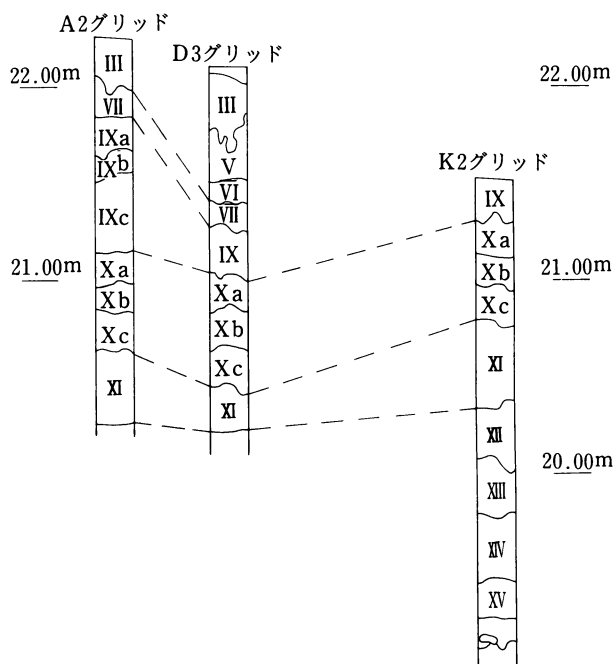
第3図 周辺地形図

畑遺跡、北谷津第 I 遺跡、北谷津第 II 遺跡、若宮第 I 遺跡、地蔵谷津遺跡¹²⁾などで集落が発見されている。さらにその南に位置する平和台遺跡群においても奈良・平安時代の集落が発見されている。このほか、三輪野山地区には延喜式内社比定社の茂呂神社が鎮座し、平和台地区では下総国分寺と同系瓦が出土する流山廃寺¹³⁾が位置している。中世以降については、三輪野山第 III 遺跡や町畑遺跡で地下式壙や土壙墓などが発見されている。また、江戸川を望む台地突端には松戸市小金大谷口城を本拠とした高城氏の出城とされる花輪城が位置している。近世においては、徳川幕府によって置かれた小金牧¹⁴⁾が、本遺跡の谷を隔てた東側の台地などに広大に広がっている。

3 層序

若宮第 II 遺跡の調査範囲は南北 5.2km にわたり、高低差は約 3 m である。土層は基本的には下総台地における典型的な堆積状況である。ただし調査区によって、ハードローム層のソフト化の進行状況などに多少の違いが認められる。各層の特徴を以下に記す。

- I 層：表土（耕作土層）
- II 層：黒褐色土層。新期テフラから III 層への漸移層である。
- III 層：ソフトローム層。IV 層のほとんど、又は調査区によって VII 層まで及ぶ箇所がある。
- IV 層：明褐色土層。以下ハードローム層。ソフト化が進行しているため、クラック中間にわずかに確認される。赤色スコリアを特徴的に含む。
- V 層：暗褐色土層。第 1 黒色帯である。
- VI 層：黄褐色土層。A T パミスがこの層全体に含まれる。なお A T パミスは上下の層にも散見される。
- VII 層：黒褐色土層。第 2 黒色帯上部である。VII 層と IX 層を明確に分層することが困難であったが、VII 層は IX 層と比べ、わずかに明色であった。
- IX 層：黒褐色土層。第 2 黒色帯下部である。VII 層よりやや暗色を増している。
- X 層：黄褐色土層。スコリアの含有量が急激に減少する。
- X I 層：灰褐色土層。粘性が強い。
- X II 層：褐色土層。やや硬質で、赤色スコリアを微量含む。
- X III 層：灰褐色土層。赤色・黒色スコリアを微量含む。
- X IV 層：褐色土層。やや大型の暗赤色スコリアを特徴的に含む。
- X V 層：暗褐色土層。武蔵野ローム全体の中で目立って暗色。斑状の黒色スコリアが含まれる。
- X VI 層：茶褐色土層。粘性が強い。斑状の黒色スコリアを多く含む。T P ブロックを含む。
- X VII 層：暗褐色土層。粘性が強い。



第 4 図 土層柱状図

- 注1 流山市教育委員会 1989『加地区遺跡群Ⅰ』
 流山市教育委員会 1991『加地区遺跡群Ⅱ』
 流山市教育委員会 1994『加地区遺跡群Ⅲ』
- 2 流山市教育委員会 1989『三輪野山遺跡群－昭和63年度確認調査概報－』
- 3 流山市教育委員会 1993『平和台遺跡発掘調査概報』
- 4 財団法人千葉県文化財センター 1996『主要地方道松戸野田線埋蔵文化財調査報告書－流山市南割遺跡・上貝塚第Ⅰ遺跡・上貝塚貝塚・下花輪第Ⅲ遺跡・三輪野山第Ⅱ遺跡』
- 5 流山市教育委員会 1988『三輪野山第Ⅲ遺跡』
- 6 下屋敷遺跡調査会 1986『千葉県流山市下屋敷遺跡発掘調査報告書』
- 7 流山市教育委員会 1978『加村台遺跡』
- 8 茂呂神社協遺跡発掘調査団ほか 1980『茂呂神社協遺跡』
- 9 三輪野山八重塚遺跡調査会 1982『三輪野山八重塚遺跡』
 流山市遺跡調査会 1985『三輪野山八重塚第Ⅱ遺跡』
 流山市遺跡調査会 1985『三輪野山八重塚遺跡B地点』
 流山市教育委員会 1987『三輪野山八重塚遺跡C地点』
- 10 増崎勝仁 1990「三輪野山向原古墳の調査と成果」『古墳文化のあけぼの』 野田市郷土博物館
- 11 小沢洋ほか 1983「千葉県流山市三本松古墳」『流山市史研究』創刊号
- 12 流山市教育委員会 1992「市野谷地蔵谷津遺跡」『平成3年度流山市内遺跡発掘調査報告書』
- 13 小出義治 1949「千葉県東葛飾郡流山廃寺址」『日本考古学年報』2
- 14 川根正教 1983「付編 流山市における小金牧の範囲について」『千葉県流山市向原野馬土手』流山市教育委員会
 松下邦夫 1996「近世小金牧の実測図」『流山市史研究』第13号

周辺遺跡地名一覧（第1図）

A 若宮第Ⅱ遺跡

- 1 加地区遺跡群 2 三輪野山遺跡群 3 平和台遺跡群 4 上新宿貝塚 5 上貝塚 6 茂呂神社 7 三輪野山向原古墳 8 花輪城 9 三輪野山貝塚 10 北谷津古墳 11 加村台遺跡（旧本多陣屋） 12 野々下貝塚 13 流山廃寺 14 三本松古墳 15 幸田貝塚 16 小金牧

旧 (平成2年度の調査グリッド)

Y = 7.4										
B区	0a	0b	0c	0d	0e	0f	0g	0h	0i	0j
	1a	1b								
	2a		2c							
	3a			3d						
	4a				4e					
	5a					5f				
	6a						6g			
	7a							7h		
	8a								8i	
9a									9j	
X = -15.6										
C区	0a	0b	0c	0d	0e	0f	0g	0h	0i	0j
	1a	1b								
	2a		2c							
	3a			3d						
	4a				4e					
	5a					5f				
	6a						6g			
	7a							7h		
	8a								8i	
9a									9j	
X = -15.65										

X = -15.85										
H区	0a	0b	0c	0d	0e	0f	0g	0h	0i	0j
	1a	1b								
	2a		2c							
	3a			3d						
	4a				4e					
	5a					5f				
	6a						6g			
	7a							7h		
	8a								8i	
9a									9j	
X = -15.9										

I区	0a	0b	0c	0d	0e	0f	0g	0h	0i	0j
	1a	1b								
	2a		2c							
	3a			3d						
	4a				4e					
	5a					5f				
	6a						6g			
	7a							7h		
	8a								8i	
9a									9j	
X = -15.95										

Y = 7.4										
J区	0a	0b	0c	0d	0e	0f	0g	0h	0i	0j
	1a	1b								
	2a		2c							
	3a			3d						
	4a				4e					
	5a					5f				
	6a						6g			
	7a							7h		
	8a								8i	
9a									9j	
X = -16.0										

Y = 7.4										
K区	0a	0b	0c	0d	0e	0f	0g	0h	0i	0j
	1a	1b								
	2a		2c							
	3a			3d						
	4a				4e					
	5a					5f				
	6a						6g			
	7a							7h		
	8a								8i	
9a									9j	
X = -16.05										

新 (平成3年度以降の調査グリッド)

Y = 7.4																					
B	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	
	10	11									10	11									
	20		22								20		22								
	30			33							30			33							
	40				44						40				44						
	50					55					50					55					
	60						66				60						66				
	70							77			70							77			
	80								88		80								88		
	90									99	90										99
X = -15.6																					

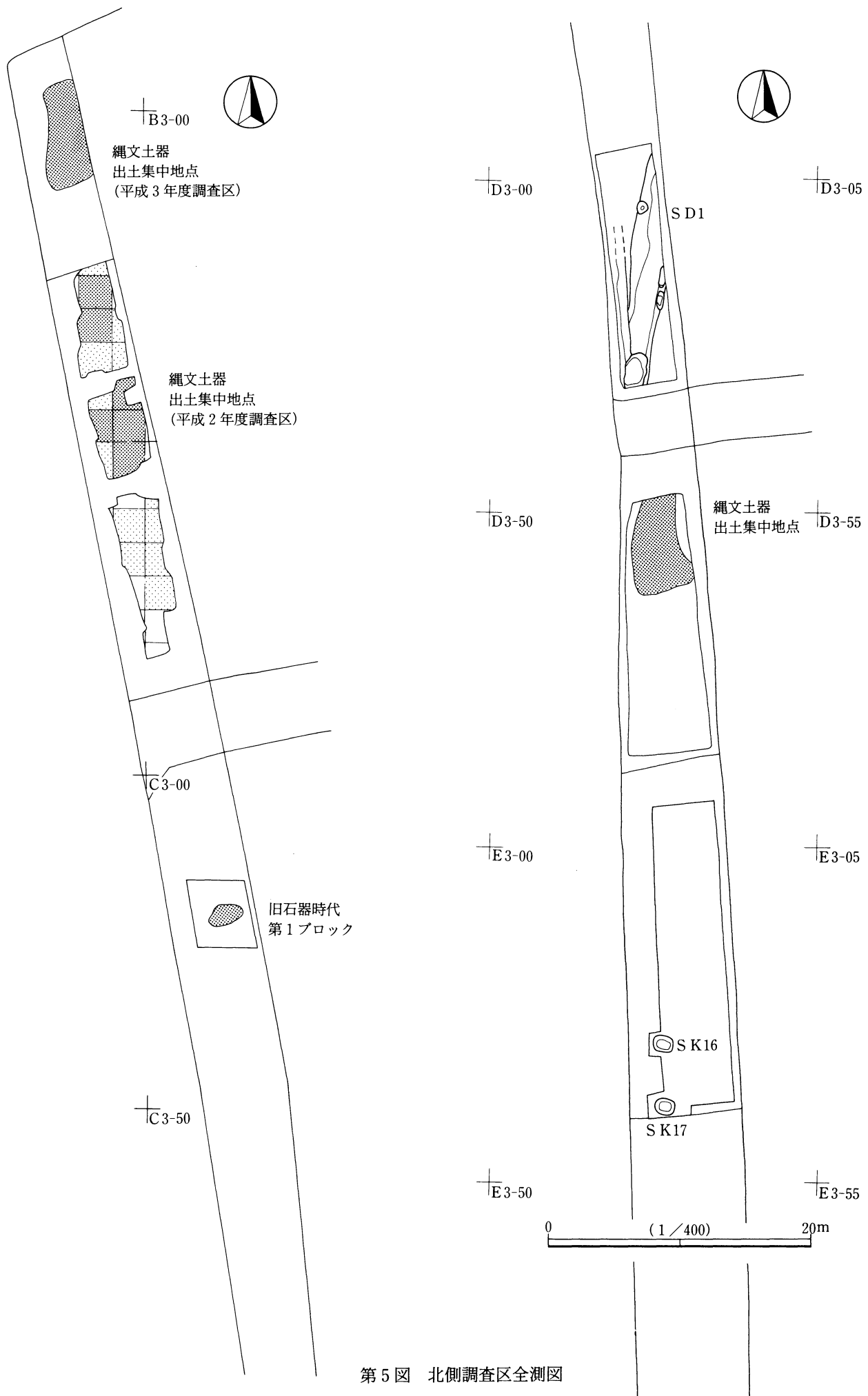
X = -15.85																					
H	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	
	10	11									10	11									
	20		22								20		22								
	30			33							30			33							
	40				44						40				44						
	50					55					50					55					
	60						66				60						66				
	70							77			70							77			
	80								88		80								88		
	90									99	90										99
X = -15.9																					

I	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	
	10	11									10	11									
	20		22								20		22								
	30			33							30			33							
	40				44						40				44						
	50					55					50					55					
	60						66				60						66				
	70							77			70							77			
	80								88		80								88		
	90									99	90										99
X = -15.95																					

Y = 7.4																					
J	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	
	10	11									10	11									
	20		22								20		22								
	30			33							30			33							
	40				44						40				44						
	50					55					50					55					
	60						66				60						66				
	70							77			70							77			
	80								88		80								88		
	90									99	90										99
X = -16.0																					

Y = 7.4																					
K	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	
	10	11									10	11									
	20		22								20		22								
	30			33							30			33							
	40				44						40				44						
	50					55					50					55					
	60						66				60						66				
	70							77			70							77			
	80								88		80								88		
	90									99	90										99
X = -16.05																					

第1表 グリッド新旧対照表



第5図 北側調査区全測図



第6図 南側調査区全測図

II 検出した遺構と遺物

1 調査区の概要（第5・6図）

調査区は南北約5.2kmにわたっている。北側から調査区を概観するとB2区とD3区の2箇所から縄文時代早期から後期にかけての遺物包含層が検出された。また、この間のC3区から小規模な旧石器時代の遺物出土集中地点が、D3区から古代の溝状遺構が発見された。G3区からH3区北半にかけては埋没谷で、元来は谷地形をなしており、遺構・遺物は一切認められなかった。H3区南半からJ3区にかけては建築物による削平が激しく遺構は検出されず、遺物の出土も稀薄であった。K2区からL2区にかけては中世末から近世にかけての遺構群が大規模に展開している。歴史時代以前の遺構は縄文時代の陥穴1基だけである。中近世の遺構が大規模に展開しているため、縄文土器などの中近世以前の遺物量は少量である。

このように、B2区からD3区にかけては縄文時代の包含層と古代の溝状遺構、K2区からL2区にかけて中近世の遺構が主に発見されている。両者の間には埋没谷が入っており、遺構の内容が明確に異なっている。そこで前者を北側調査区、後者を南側調査区、その他の地点をその他の調査区と分けて報告する。

2 旧石器時代

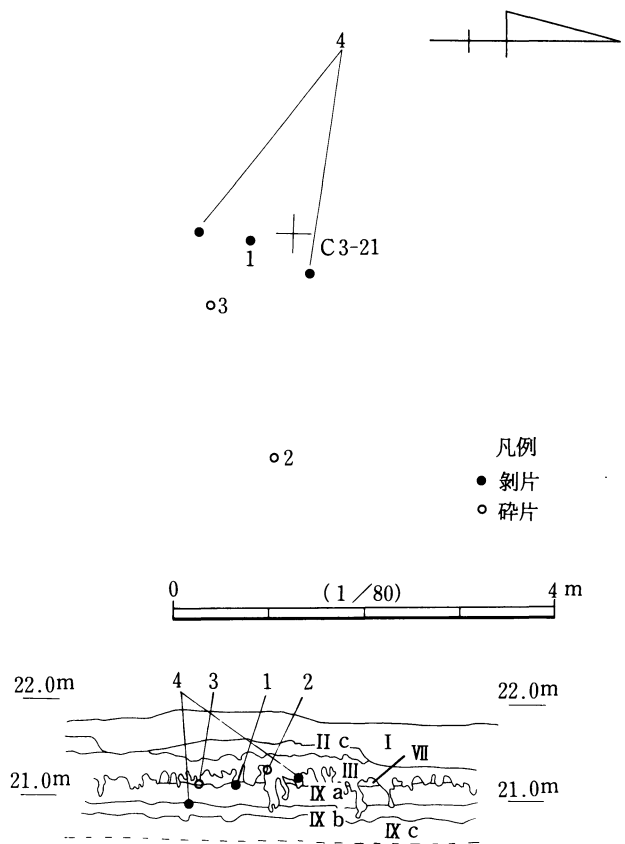
北側調査区のC3区から石器集中地点を1か所検出した。坂川の支谷が西側にやや深く抉れた部分の北側に当たる。V層を主体とした小規模なブロックである。調査区の大部分でソフト化が進行していたが、C～D区が調査区全体の中で最も第1黒色帯の堆積状況が良好であった。

第1ブロック

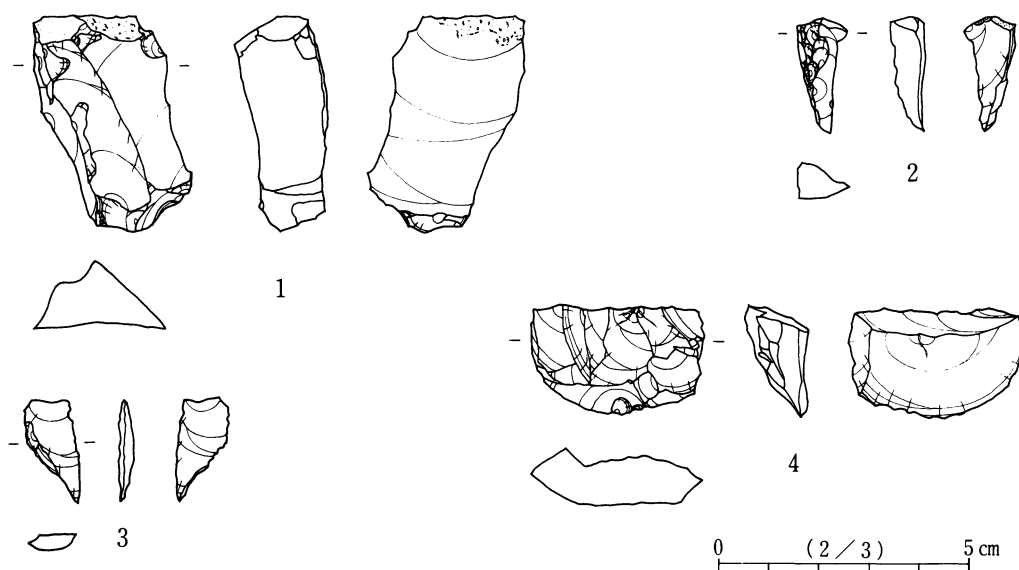
遺構（第7図、図版2）

C3-21区の確認調査グリッドから珪質頁岩製剥片が1点検出された。出土層位は立川ローム層上位のV層であった。遺物の分布傾向を把握するため、周囲5m×5mの範囲まで拡張して確認調査を実施した。遺物は他に4点の剥片が検出されたものの、遺物分布は拡張区内に小さくまとまり、これ以上広がらないことが明らかであった。

出土層位はV層を中心として、III層からIXa層にかけて上下に分布している。平面分布は1点を除き、直径1m程の円におさまる、まとまった分布状況を示す。石器の石材はすべて珪質頁岩である。



第7図 第1ブロック遺物分布図



第8図 第1ブロック石器

遺物（第8図、図版9）

1は縦長剥片である。長さ4.32cm、幅3.18cm、厚さ1.86cm、重量19.17gを測る。表面には剥片末端部側に設定された打面からの剥離痕が見られる。また、主要剥離面の打面の方向は表面の剥離の打面とは対称的な位置である。両設打面の石核から作出されたと考えられるが、いわゆる石刃技法に基づく剥片剥離によるものではない。

2は碎片である。長さ2.31cm、幅1.02cm、厚さ0.69cm、重量1.08gを測る。3は碎片である。長さ2.01cm、幅1.08cm、厚さ0.31cm、重量0.43gを測る。2の表面には微細な剥離が確認できる。いずれも定型的な石器を作出するための調整ではなく、剥片剥離段階の、おそらく石核整形を目的とした剥離痕と考えられる。よって、2と3は剥片剥離時に作出された碎片である。

4は剥片である。長さ2.18cm、幅3.48cm、厚さ1.12cm、重量7.56gを測る。厚い剥片で、表面には同一方向から連続的に剥片を作出した痕跡が見られる。この剥片が作出された時点の打面は、裏面上方に存在し、かなり広い打面を設定しているのがわかる。表面の剥離とは方向は一致するが、異なる打面であり、連続的に剥片剥離を行った後に打面を再生し作出された剥片であることが理解できる。

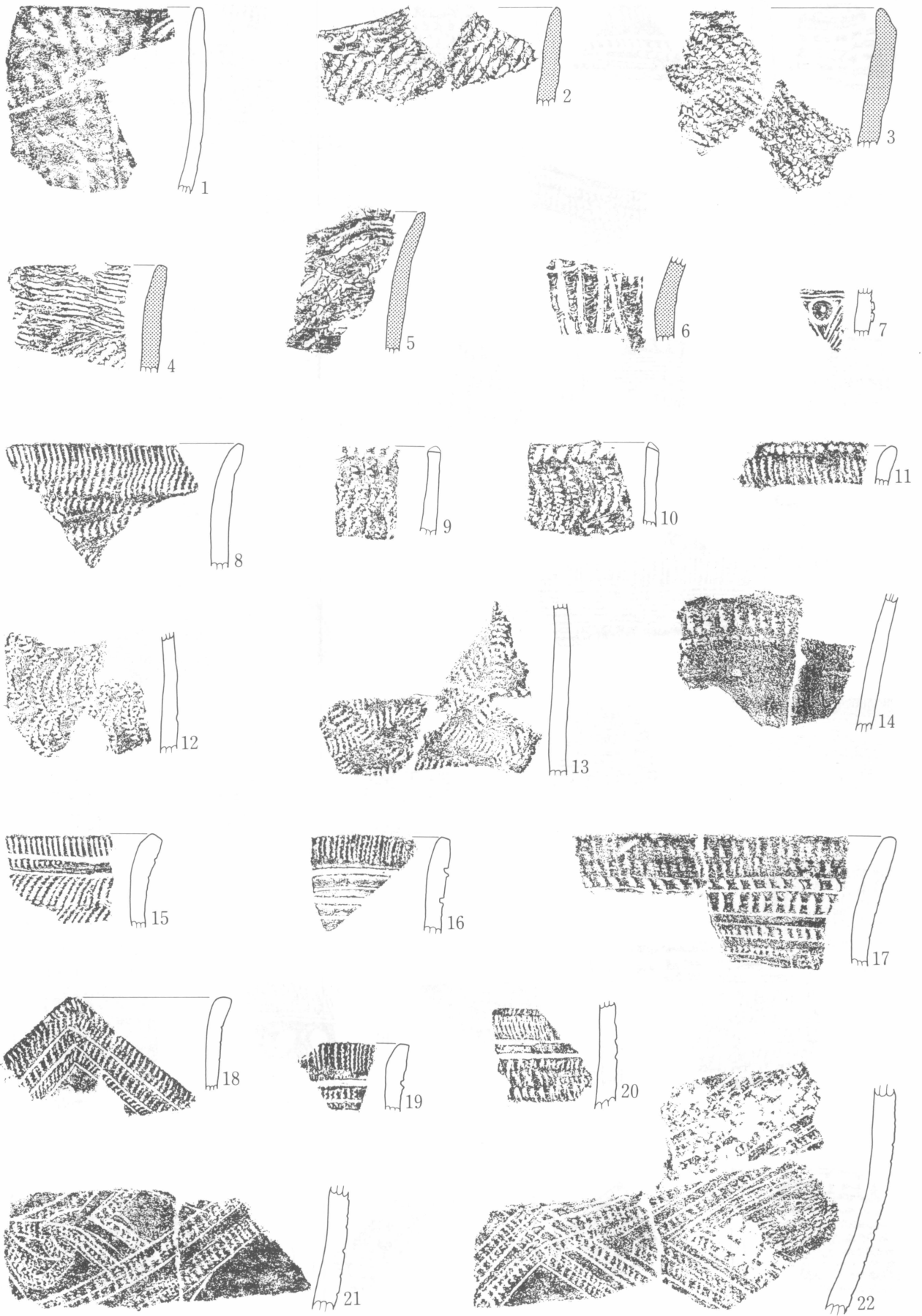
3 縄文時代

北側調査区ではB2区～D3区にかけて、縄文時代前期後半の浮島式・興津式期を中心とした早期から後期の土器包含層が発見された。ただし、C3区からD3区北半にかけては重機によりローム層上面まで攪乱を受け、縄文時代の包含層は確認されなかった。なお、調査区に北側に隣接する下屋敷遺跡からは興津式期の竪穴住居跡が発見されており、その関連が注目される。

一方、南側調査区ではK2区から陥穴が1基発見されている。周辺は大規模に中近世の遺構が展開しているためか、ほとんど縄文土器は発見されなかった。

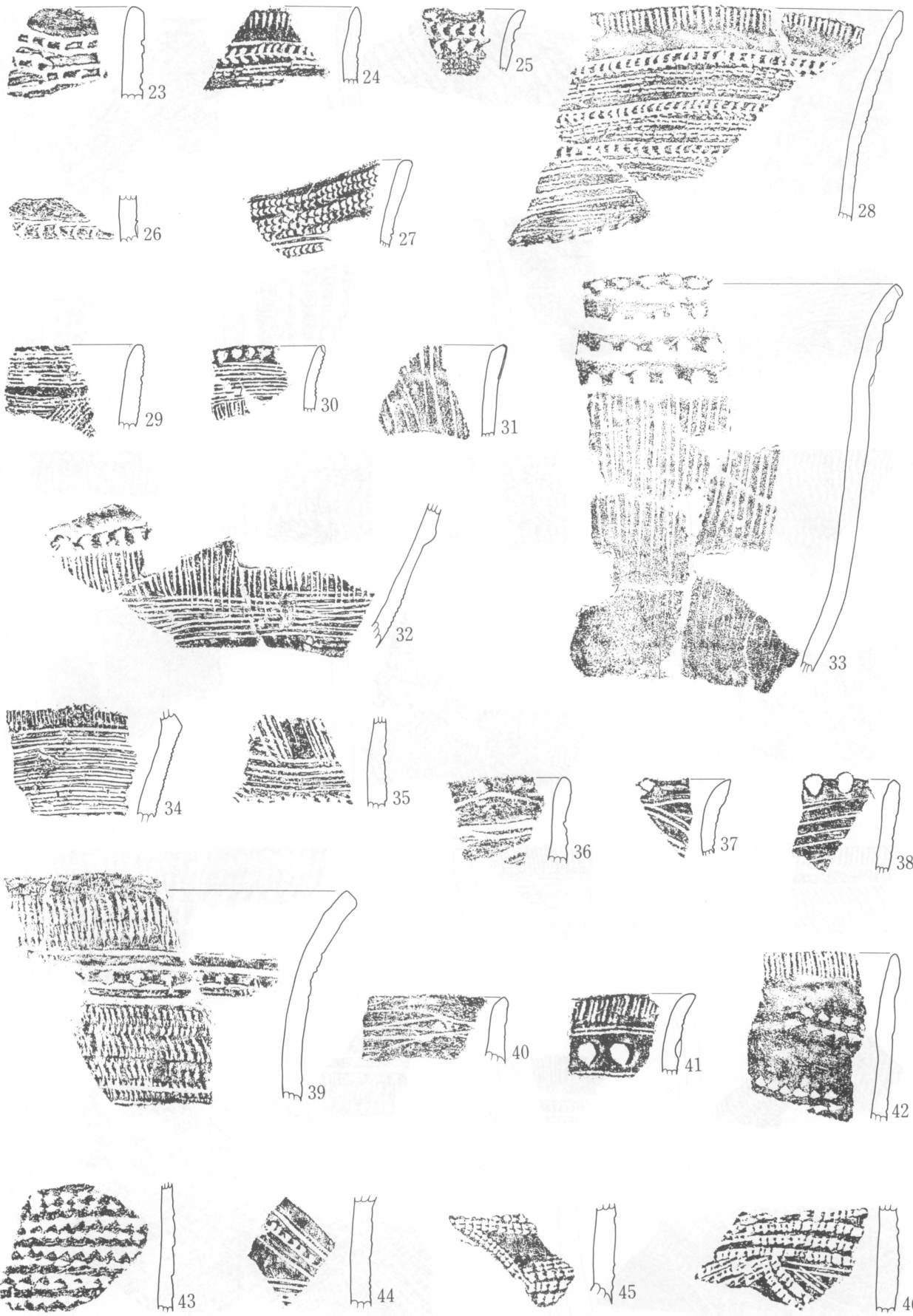
(1) 北側調査区（第5図、図版2）

B2区からD3区にかけての遺物包含層からの出土遺物は整理箱約3箱分である。早期の撚糸文土器から後期の堀之内式土器まで4つに大きく分類できる。

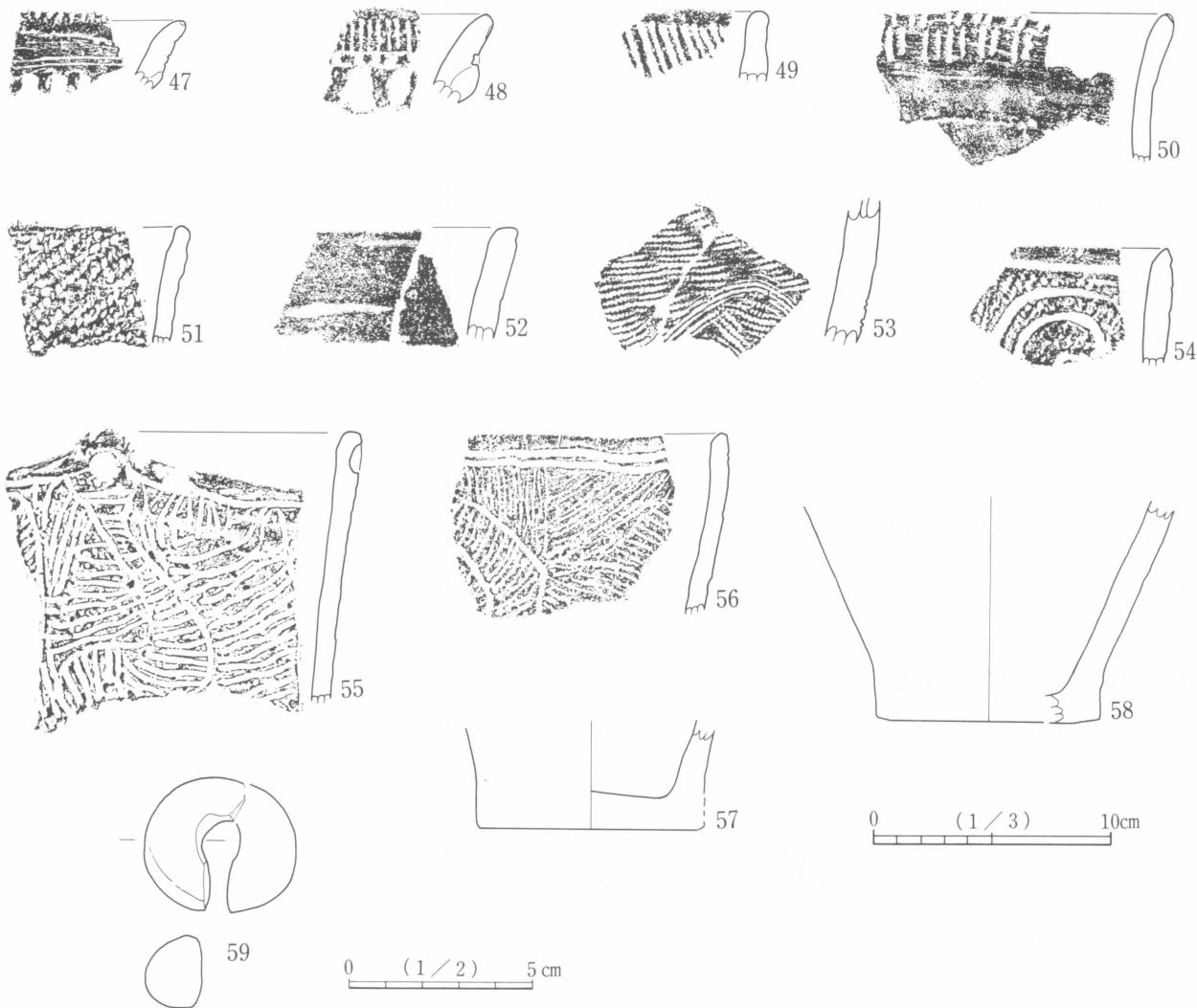


0 (1/3) 10cm

第9図 縄文土器(1)



第10図 縄文土器(2)



第11図 縄文土器(3)

- (1) 第1類土器 撚糸文系土器
- (2) 第2類土器 繊維系土器
- (3) 第3類土器 前期後半の土器
- (4) 第4類土器 中後期の土器

第1類土器 撚糸文系土器 (第9図1、図版10)

出土点数はわずかである。1は無文のものである。口縁部はほぼ直立し、口唇部上端に平坦面がわずかに作られている。

第2類土器 繊維系土器 (第9図2～6、図版10)

2と5は波状口縁で、縄文のみで施文されている。4も横位の縄文のみで施文されている。3は口縁下に半截竹管による刺突文が施されている。2から5は黒浜式に比定される。6は縦位に沈線が施されている。

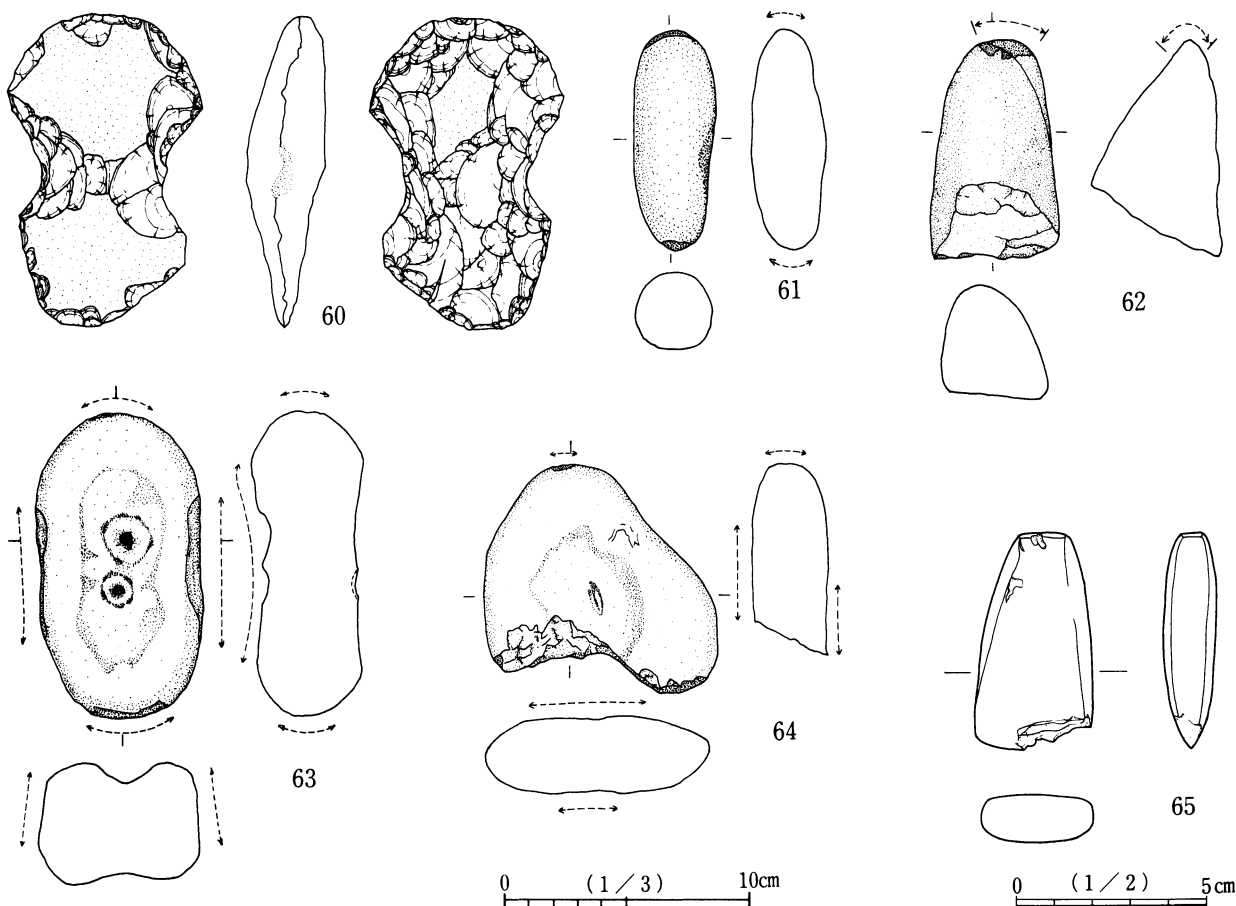
第3類土器 前期後半の土器 (第9図7～第11図50・57・58、図版10～12)

7は条線で三角形に区画された中にボタン状貼付文が施文されている。諸磯C式に比定される。8から52は浮島式・興津式に比定される。整理箱2箱分を占め、北側調査区出土縄文土器の大半を占める。施文

方法などにより複数の種類に細分が可能である。8から14は貝殻文が主に施文されるものである。いずれもやや密な間隔の波状貝殻文が施されている。8の口縁部には縦位の沈線が施されている。9～11は口唇上端に刻み目が見られる。15から22は沈線区画の中に貝殻文を充填するものである。15、16、18の口縁部には縦位の沈線が施されている。18は波状口縁である。23から28は横位に半截竹管文が施されるものである。24と28は口縁部に縦位に沈線が施されている。23と25の口縁部は無文である。27は波状口縁である。29から35は条線を主体とするものである。29と35は横位と斜位の条線が、30と32と34は横位と縦位の条線が組み合わせて施されている。30と32の口縁部には指頭圧痕が施されている。31の口縁部には縦位の沈線が施されている。32と33は横位に指頭圧痕が施されている。33は口縁部直下に輪積み状に張り出した3段に指頭圧痕が巡っている。36から38と40は沈線を主体としたものである。37と38の口唇上端には棒状工具による圧痕が施されている。39と40から46は刺突文が施されたものである。40は口唇部上端に刻み目が施され、口縁部などに密な貝殻波状文が施されている。41と42の口縁部には縦位の沈線が施されている。42と43の胴部には三角形の刺突文が施されている。47と48は指頭圧痕が施されたものである。47の口唇部上端には刻み目が、48の口縁部には縦位の沈線が施されている。49と50は口縁部に縦位の沈線が施されたものである。57と58は底部で、いずれも平底である。底部まで施文されているものはない。

第4類土器 中後期の土器 (第11図51～56、図版12)

51は口縁部まで縄文を地文としている。52は無文の口縁部である。53は縄文の地文に櫛歯状工具によって曲線が作出されている。54は縄文を地文に、沈線を施している。55は小さな波状口縁で、波頂部下に円



第12図 縄文時代石器

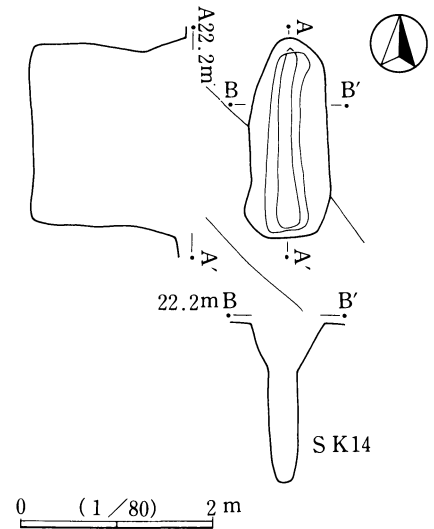
形刺突文が施されている。縦位、横位、斜位の沈線によって複雑な文様が作出されている。56は口縁部に横位の沈線が2条巡り、その下に細かな条線文がやや曲線状に施されている。

グリッド出土縄文時代土製品（第11図、図版12）

59は土製の玦状耳飾である。

グリッド出土縄文時代石器（第12図、図版9）

60はD3区出土の変成岩製の分銅形の打製石斧である。長さ11.98cm、幅7.62cm、厚さ3.02cm、重量258.33gを測る。61と62は流紋岩製の敲石である。61は小型の棒状の礫を使用し、62はやや大きなやや扁平な礫を使用し、素材礫の形状を変えずに石器として使用している。なお62は被熱している。61は長さ8.48cm、幅3.24cm、厚さ2.92cm、重量111.59gを測る。62は長さ8.42⁺cm、幅5.02cm、厚さ5.12⁺cm、重量266.32⁺gを測る。63は窪み石である。片面に2個所、片面に1個所の窪みがある。なお4個所の側部と2個所の窪みがある片面に擦り石としての使用面が認められる。長さ11.78cm、幅6.56cm、厚さ4.34cm、重量544.32gを測る。64は花崗岩製の扁平礫の一部を研磨したものである。長さ8.74⁺cm、幅9.24cm、厚さ2.96⁺cm、重量321.71⁺gを測る。



第13図 陥穴

(2) 南側調査区

S K 14（第13図、図版3）K2-18区に位置する。中近世の溝状遺構S D 4に南側の一部を切られている。ほぼ北-南方向に主軸を持つ。長軸2.1m、短軸1.2m、深さ1.6mを測る。両側面の壁は、底面から約1.2m付近で外側に屈曲し上方へ開いている。底面はほぼ平らである。遺物は出土していない。

グリッド出土縄文時代石器（第12図6、図版12）

65は蛇紋岩製の小型の磨製石斧である。L2区での表採資料である。長さ5.56⁺cm、幅3.12cm、厚さ1.40cm、重量40.86⁺gを測る。

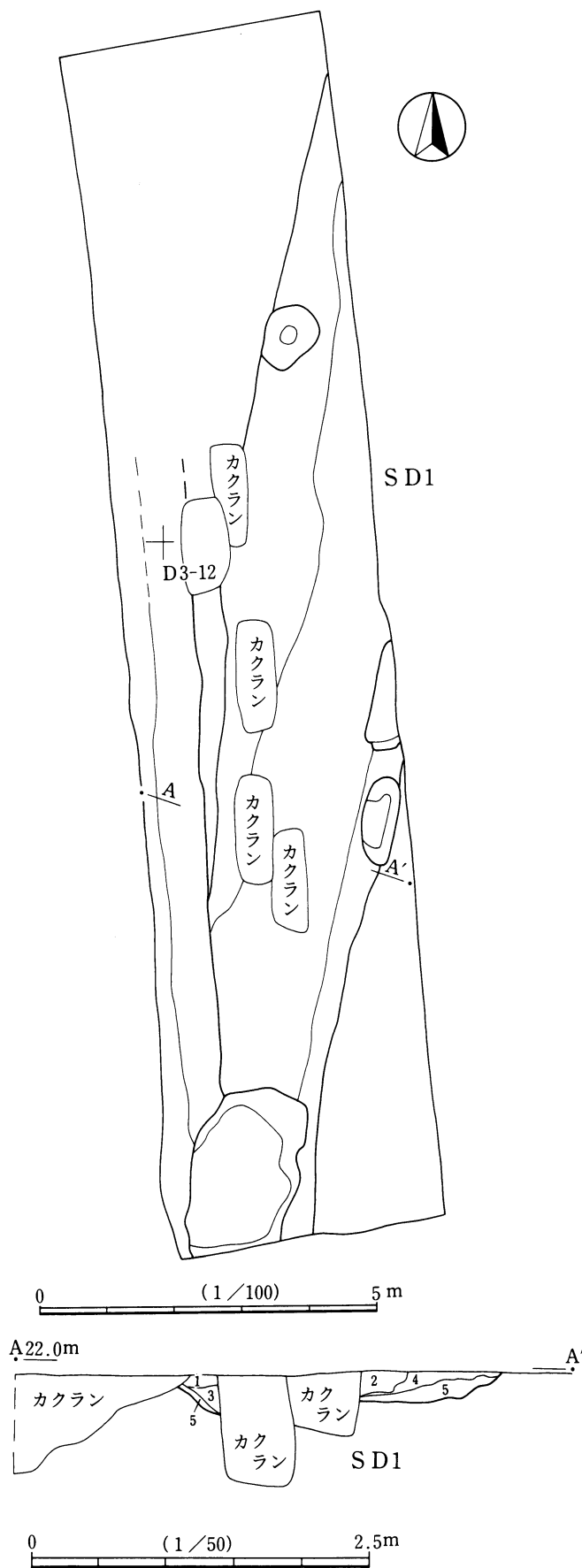
4 歴史時代

(1) 北側調査区

D3区から溝状遺構S D 1が、E3区から土坑が2基発見されたのみで、歴史時代の遺構は極めて希薄である。遺物についても歴史時代のものは、ほとんど出土していない。

溝状遺構

S D 1（第14図、図版3）ローム層上面まで重機により攪乱されていたため、全体の残り具合は悪い。また、現道に伴う工事による攪乱と、現道に沿った畑に伴うイモ穴などによっても攪乱を受けていた。約40mにわたってほぼ南北方向に直線状に発見されたが、さらに北北東方向と南南西方向の調査区域外に伸びている。北に対してやや東に振れ、N-70°-Eである。上端幅約2.4m、下端幅約0.9m、深さ0.2mを測り、底面はほぼ平らである。東側の立上がりは比較的シャープであるが、西側は極めて緩い立上がりである。覆土は全体にしまっており、4層と5層はロームブロックを含み、強くしまっている。遺物は覆土から須恵器の小片が1点出土しているが、このほかには全く出土していない。周辺グリッドからは古代の遺物は発見されておらず、S D 1が古代まで遡る可能性が高い。また、覆土が強くしまっており、底面も



第14図 北側調査区溝状遺構

強くしまっていた点から、道路として利用された可能性がある。覆土1層：暗褐色土層。ロームを若干含む。2層：暗褐色土層。ロームを多く含む。しまり強い。3層：暗褐色土層。ロームをやや多く含む。しまり強い。4層：黒褐色土層。ロームをやや多く含む。5層：暗褐色土層。ロームブロックを多く含む。

土坑

SK16 (第15図、図版6) 長軸1.5m、短軸1.1mほどの平面隅丸方形の土坑である。深さは2.3mを測る。壁面は不整形であるが、底面はほぼ平らである。覆土はロームブロックを主体として、全体的にしまりに欠ける。一気に埋め戻されている状況を呈している。遺物は出土していない。

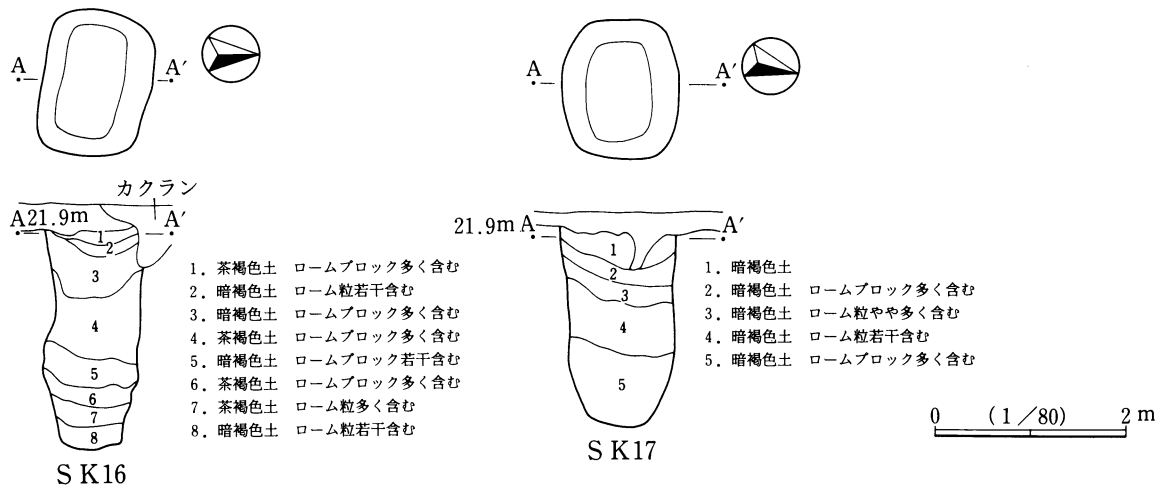
SK17 (第15図、図版6) 長軸1.4m、短軸1.2mほどの平面隅丸方形の土坑である。深さは1.2mを測る。壁面はほぼ垂直に掘り込まれている。底面はやや丸味を帯びているが、底面中央は平らである。覆土はロームブロックを主体として、全体にしまりに欠ける。SK16同様に、一気に埋め戻された状況を呈している。遺物は5層中から須恵質の甕の小片が2点出土している。壁面などの掘り方に若干の違いがあるものの、SK16とほぼ同様の形態・覆土の土坑であり、軸方向も同一である。土壙墓などの同じ性格を有していたと考えられるが、詳細は不明である。

(2) 南側調査区

K2区からL3区にかけて中近世の遺構が多く発見された。遺構の性格と位置関係、軸方向、時期差などから複数の遺構群に分けることが可能である。以下、遺構の種別ごとに記述する。

土坑

SK1 (第19図、図版5) SD6の北側に位置する天井部が崩落した地下式壙である。地下式単室で、竪坑は不明瞭ながら南側に浅い段を有する。覆土の堆積状況は南側からの土の流入を示しており、1mほど覆土が堆積した後に大きく天井が崩落した状況が窺える。よって、南側の浅い段が地下式壙の竪坑



第15図 北側調査区土坑

に伴う掘込みと考えられる。主室底面は平らでほぼ長方形を呈し、幅2.4m、奥行き1.8mほどを測る。確認面からの深さは2.4mであるが、壁面の状況から主室の高さは1.5m前後と推測される。入口の南側の浅い段の底面が、主室の天井面とほぼ対応する形態である。S D 6 と重複しており、少なくともS K 1 の天井が崩落した後にS D 6 が機能していた点を確認できる。

遺物 (第16図、図版13) 主室の底面から1の青磁碗と、2の瀬戸・美濃系の緑釉小皿の小片、そして板石の小片と骨片が出土した。このほか、覆土中からは遺物は出土していない。

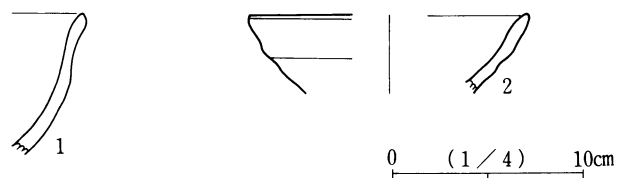
S K 2 (第19図、図版5) S D 6 の北側に位置する天井部が崩落した地下式墳である。地下式単室で、南側に浅い掘込みの竪坑を伴う。主室底面は平らでほぼ長方形を呈し、幅2.2m、奥行き1.4mを測る。確認面からの深さは1.9mほどであるが、壁面の状況から主室の高さは1.4m前後と推測される。S K 1 同様に浅い竪坑の底面と主室の天井面がほぼ対応する形態である。またS D 6 と重複しているが、S K 1 の天井部が崩落した後にS D 6 が掘られている状況が窺える。遺物は常滑の甕の小片4点と、在地系の土器の小片2点が出土した。

S K 3 (第19図) S D 6 が直角に折れ曲がる地点の南側に位置する土坑である。南北方向のS D 3 の東側に沿って位置している。長さ3.1m、幅1.1m、深さ0.7mの長方形の土坑である。底面はほぼ平らである。溝状遺構との前後関係は不明である。ただし、S D 3 と軸方向は一致する。遺物は出土していない。

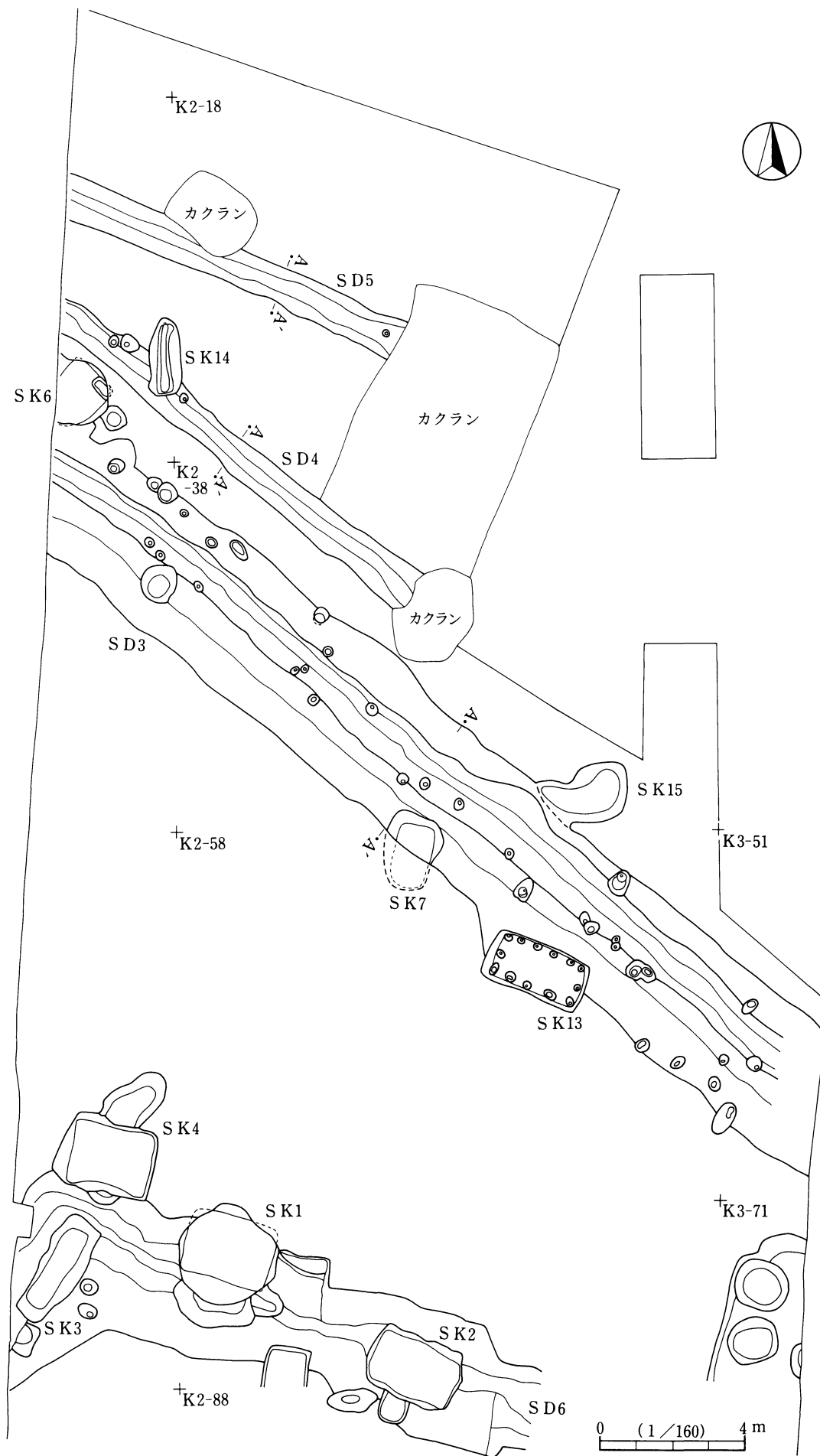
S K 4 (第19図、図版5) S D 6 が直角に折れ曲がる地点の北側に位置する天井部が崩落した地下式墳である。地下式単室で、南側に簡単な足掛け穴程度の竪坑が確認される。主室底面はほぼ長方形を呈し、幅2.4m、奥行き1.5mを測る。確認面からの深さは1.8mほどであるが、壁面の状況から主室の高さは1.2m前後と推測される。主室の底面から竪坑の底面までの高さは0.7mほどで、S K 1 やS K 2 と比べて、竪坑が深く掘られている。S D 6 と一部重複している。

また、天井部が崩落した後、長楕円形の土坑が掘られている。遺物は瀬戸・美濃系の灰釉皿の小片が1点出土している。

S K 5 (第20図) S D 6 の南側に位置する天井部が崩落した地下式墳である。地下式単室で南側に足掛



第16図 S K 1陶磁器



第17図 南側調査区遺構配置図(1)

け穴程度の堅坑が位置する。主室底面はほぼ長方形を呈し、幅2.8～3.0m、奥行き1.8～2.0mを測る。確認面からの深さは2.6mほどであるが、壁面の状況から主室の高さは1.4m前後と推測される。主室の底面から堅坑の底面までの高さは1.3mほどで、S K 1、2同様に堅坑の底面と主室の天井部がほぼ対応する形態である。なお、主室の底面はほぼ平坦であるが、堅坑付近の底面には直径50cm～70cmの長楕円形の若干の落込みが認められた。おそらく入り口に伴って、踏みしめられた結果によるものと推測される。遺物は出土していない。

S K 6 (第20図、図版5) S D 3と重複する天井部が崩落した地下式墳である。西側部分が発掘調査区域外へ延びている。主室底面の西南側のプランが膨らんでいることから、西南側に堅坑が開口していたと考えられる。S D 3との重複関係は不明であるが、S D 3と主室の軸方向が一致し、S D 3側に開口している状況からすると、S D 3と関連を有する可能性が高い。主室底面は西南側が膨らんだ方形で、幅1.4m、奥行き1.7m以上を測る。確認面から底面までの深さは2.0mほどであるが、壁面の状況から主室の高さは1.0m前後と推測される。なお、主室の底面はほぼ平坦であるが、底面の北東隅部から長さ約60cm、幅約30cm、深さ約10cmの方形の掘り方が発見された。遺物は出土していない。

S K 7 (第20図) S D 3と重複する土坑である。S D 3と異なり、ほぼ南北方向に主軸方向をもつ。S D 3との重複関係は不明である。平面プランはほぼ長方形を呈し、長さ2.0m、幅1.4m、深さ1.2mを測る。性格は不明である。遺物は出土していない。

S K 8 (第20図、図版6) 調査区南東部の土坑群の北側に位置する地下式墳である。一部天井部が残っている。地下式複室である。壁面の掘り方と埋土状況から、地下式墳の南側に堅坑があったと考えられる。ただし、地下式墳が完全に埋没した後、堅坑の周辺部分は深さ1.6mほど掘り返されている。地下式墳の底面の規模は幅2.3m、奥行き1.8mを測る。確認面からの深さは2.2mほどであるが、壁面の状況から主室の高さは1.1m前後と推測される。主室の底面はほぼ平坦であるが、堅坑が接していたと考えられる底面の南側付近が、踏みしめられて若干落ち込んでいる。遺物は出土していない。

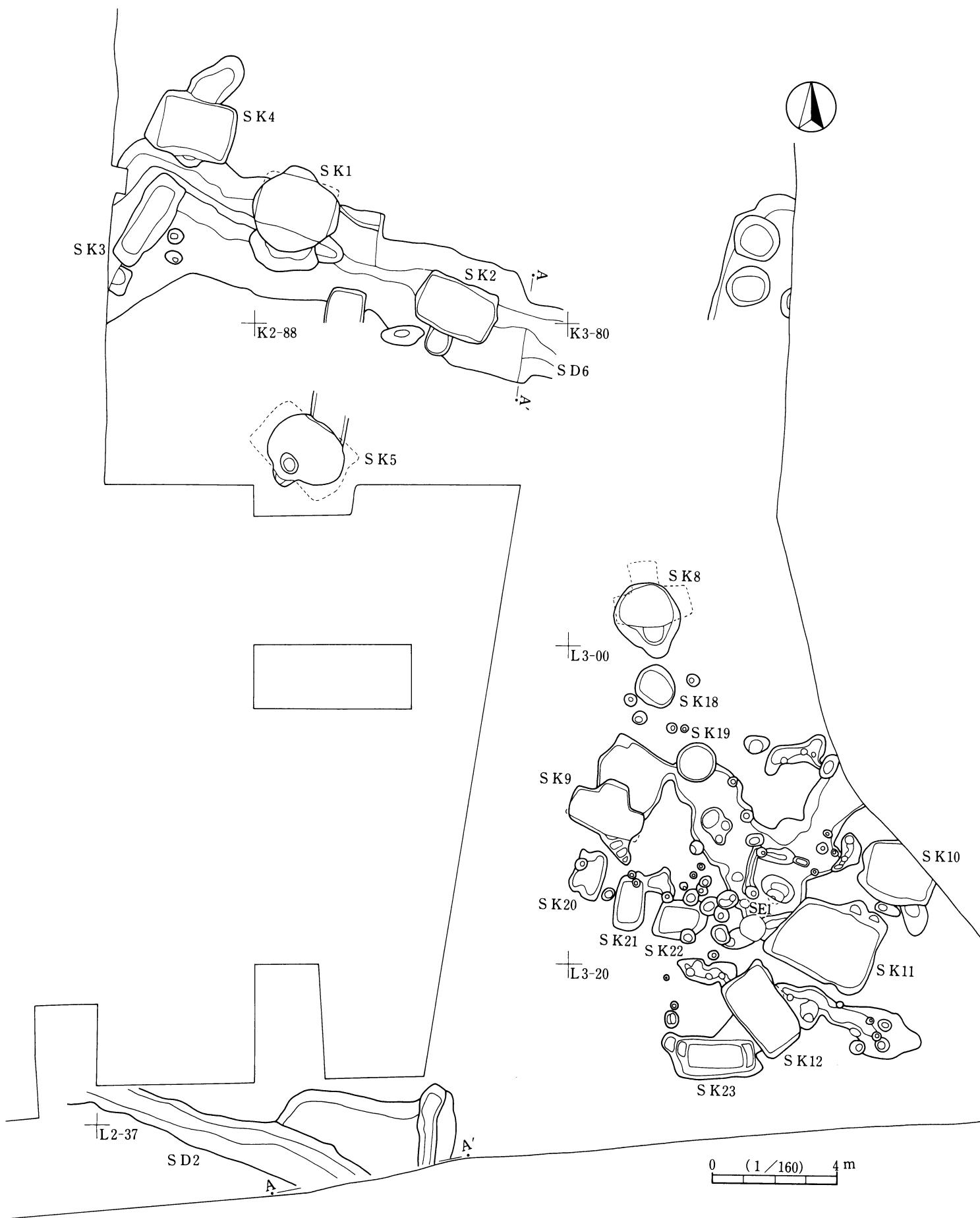
S K 9 (第20図) 調査区南東部の土坑群中に位置する天井部が崩落した地下式墳である。地下式複室である。堅坑は南側に開口していたと推測される。南側の浅い段状の落込みが入口に伴うものと推測される。地下式墳の底面の規模は幅2.3m、奥行き1.4mを測る。確認面からの深さは1.6mほどである。遺物は出土していない。

S K 10 (第20図、図版6) 調査区南東部の土坑群中に位置する地下室である。北東部分が調査範囲外へ伸びている。幅2.2m、奥行き2.0m、深さ1.1mを測る。底面は平らであるが、中央付近に直径20cm～30cm程の楕円形の小ピットを伴っている。また、南東隅付近に浅い掘込みがあり、地下室への降り口を示す可能性がある。遺物は出土していない。

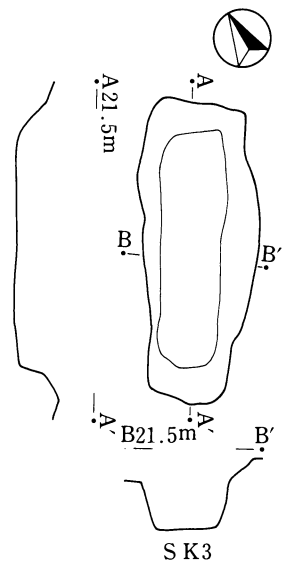
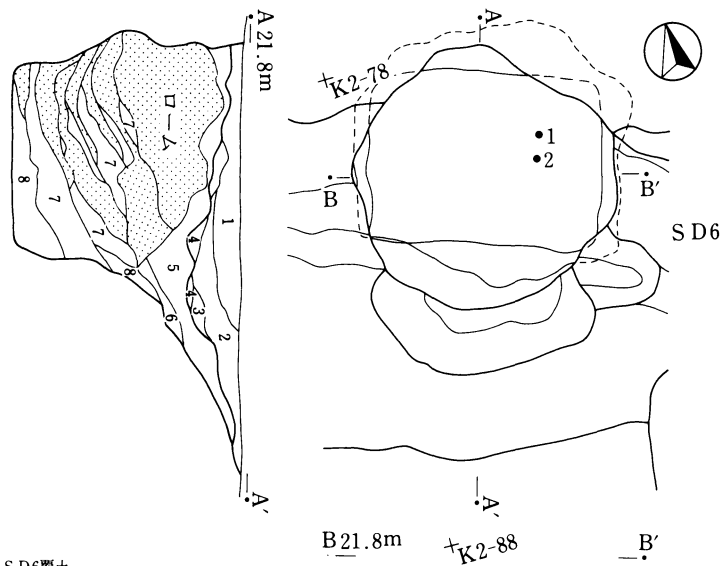
S K 11 (第21図) 調査区南東部の土坑群中に位置する地下室である。やや不整長方形で、幅2.9m～3.4m、奥行き2.2m、深さ1.6mを測る。北側に降り口を示す、足掛け穴が掘り込まれている。

遺物(第22図、図版13) 1と2はカワラケで、ロクロ成形の底部糸切り無調整である。1は口径9.0cm、底径4.2cm、器高2.5cmを測る。2は推定口径12.0cm、底径6.2cm、器高1.9cmを測る。このほかに志野の皿の小片1点、常滑の甕の小片3点が出土している。

S K 12 (第21図、図版6) 調査区南東部の土坑群の南側に位置する地下室である。平面プランは整った長方形を呈している。幅2.7m、奥行き1.6m、深さ1.4mを測る。



第18図 南側調査区遺構配置図(2)



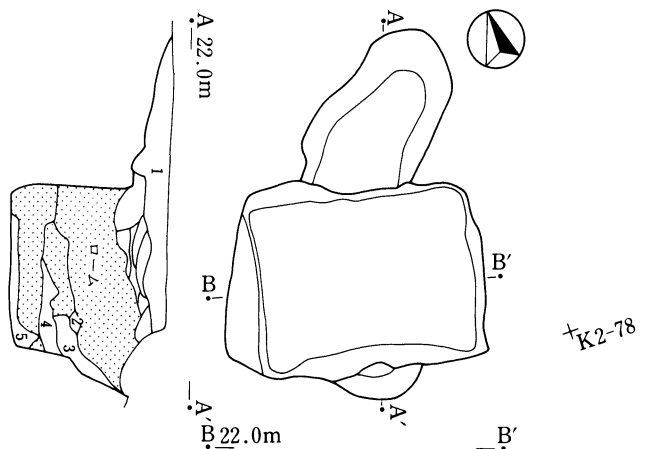
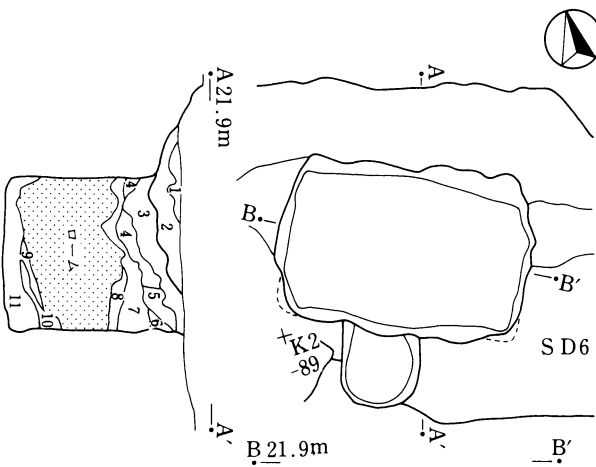
SD6覆土

- 1. 黒褐色土 ローム粒とロームブロック含む
- 2. 黒褐色土 ローム粒若干含む
- 3. 黒褐色土
- 4. 黒色土 ローム粒若干含む

SK1覆土

- 5. 黒褐色土 ローム粒含む
- 6. 黒褐色土 ローム粒若干含む
- 7. 暗褐色土 しまりなし
- 8. 黒色土 ローム粒少量含む、しまりあり

SK1



SD6覆土

- 1. 黒褐色土 ローム粒若干含む
- 2. 暗褐色土 ロームブロック含む

SK2覆土

- 3. 暗褐色土 ロームブロック含む
- 4. 黒褐色土 ローム粒多く含む
- 5. 黒褐色土 ローム粒多く含む、しまりあり
- 6. 暗褐色土 ロームブロック多く含む
- 7. 黒色土 ロームブロック含む
- 8. 黒色土 ロームブロック多く含む
- 9. 褐色土 ローム粒多く含む
- 10. 黒色土 ロームブロック含む
- 11. 黒褐色土 ローム粒多く含む

SK2

1. 土杭覆土

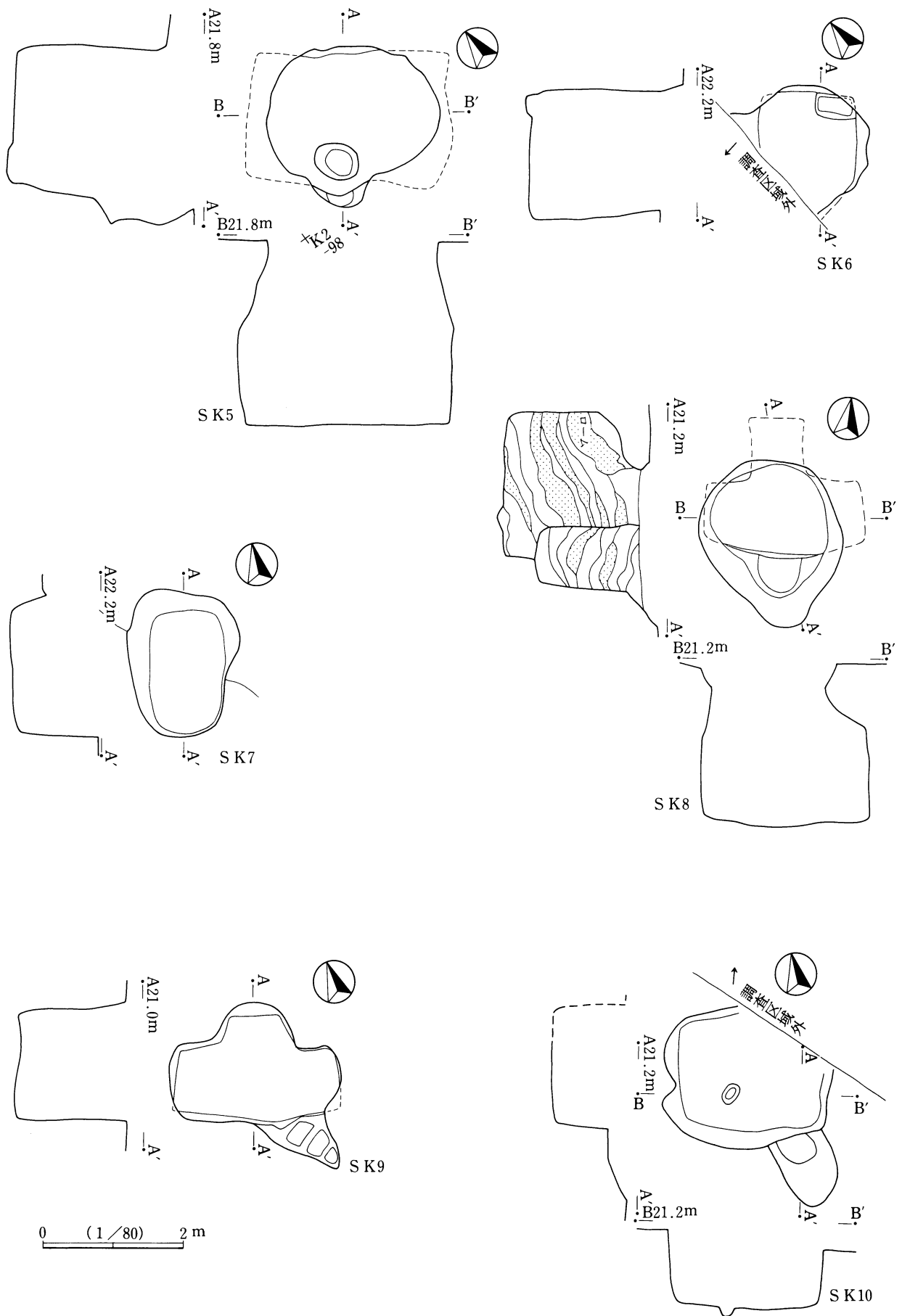
SK4覆土

- 2. 黒色土
- 3. 黒色土 ローム粒とロームブロック含む
- 4. 黒色土 しまりあり
- 5. 黒褐色土

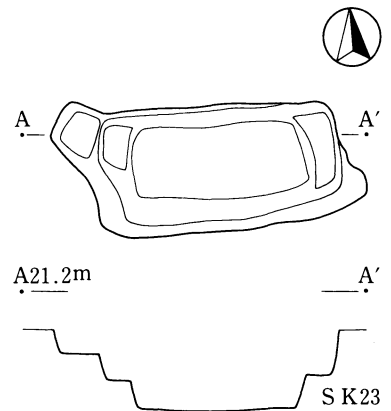
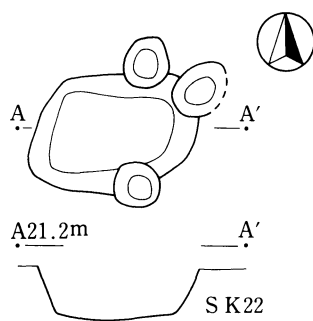
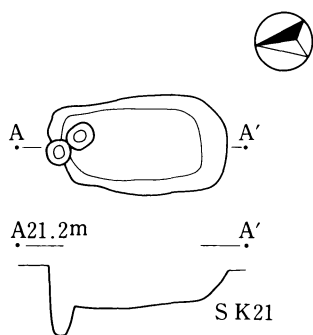
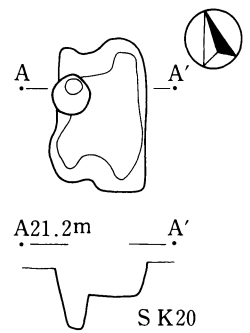
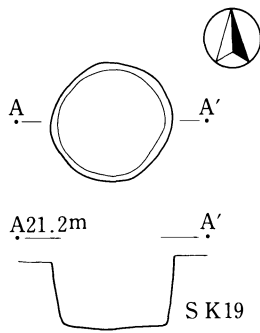
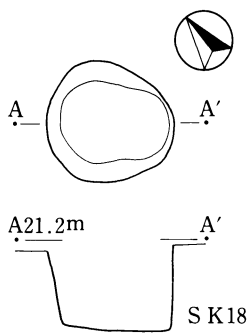
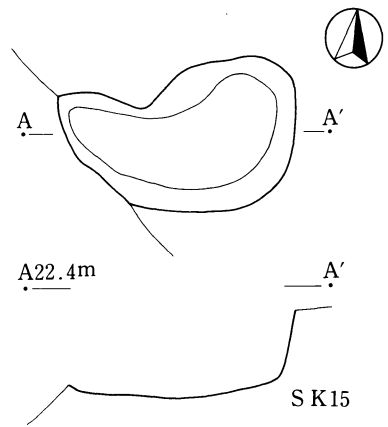
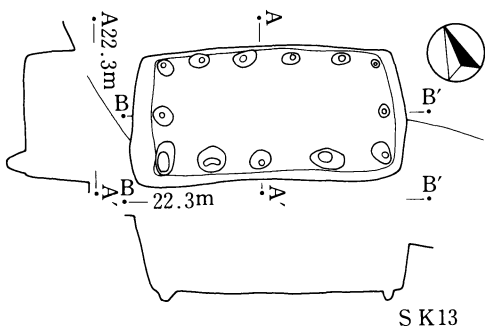
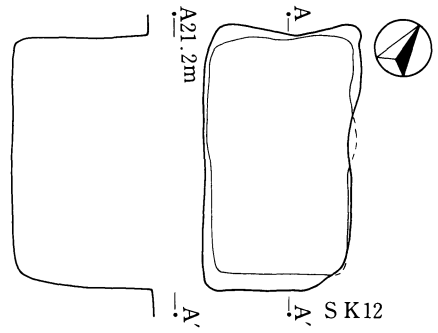
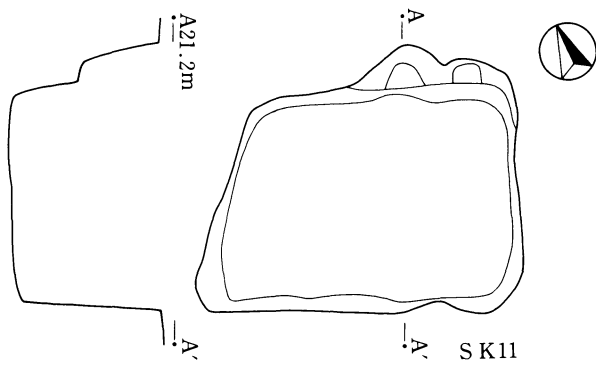
SK4

0 (1/80) 2m

第19図 南側調査区土杭(1)



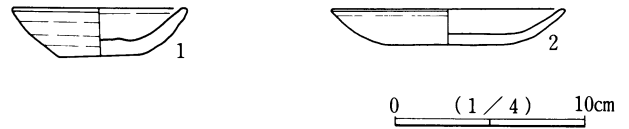
第20図 南側調査区土杭(2)



0 (1/80) 2 m

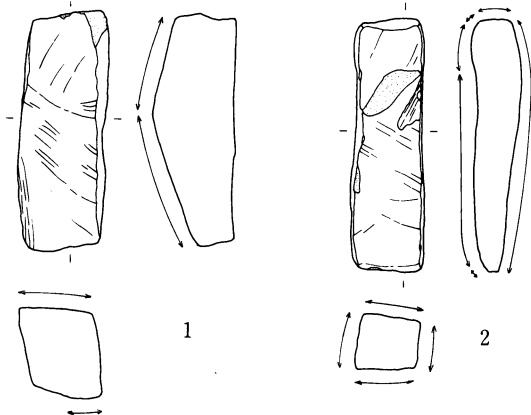
第21図 南側調査区土杭(3)

遺物（第23図）1は泥石製の砥石で、3面が未使用面で整形痕跡が残っている。2も泥石製の砥石で、全面被熱している。このほかに播鉢の小片が1点出土している。



第22図 S K11土器

S K 13（第21図）S D 3と重複する竪穴状遺構である。S D 3との前後関係は不明である。ほぼ長方形プランで、壁面はしっかりしている。長さ2.8m、幅1.4m、深さ0.7mを測る。底面はほぼ平らであるが、壁際の四囲から13個のピットが検出された。ピットはいずれも小規模で、竪穴の底面からの深さは5cmから30cmほどである。上屋を支える下部構造とは考え難く、壁面維持に伴うピットの可能性が高い。遺物は出土していない。



第23図 S K12石製品

S K 15（第21図）S D 3と重複する不整形の土坑である。S D 3との前後関係は不明である。長さ2.4m、幅1.5m、深さ0.8mを測る。底面はほぼ平坦である。S D 3との前後関係は不明である。遺物は出土していない。

S K 18（第21図）調査区南東部の土坑群中に位置する土坑である。直径1.2mほどの楕円形プランで、深さ0.8mを測る。遺物は出土していない。

S K 19（第21図）調査区南東部の土坑群中に位置する土坑である。直径1.2mほどの円形プランで、深さ0.7mを測る。遺物は出土していない。

S K 20（第21図）調査区南東部の土坑群中に位置する土坑である。長さ1.5m、幅1.0mほどの不整形のプランで、深さは0.3mを測る。西側のピットを伴うかは不明である。遺物は出土していない。

S K 21（第21図）調査区南東部の土坑群中に位置する土坑である。長さ1.8m、幅1.0mほどの不整形のプランで、深さは0.3mを測る。北側のピットを伴うかは不明である。遺物は出土していない。

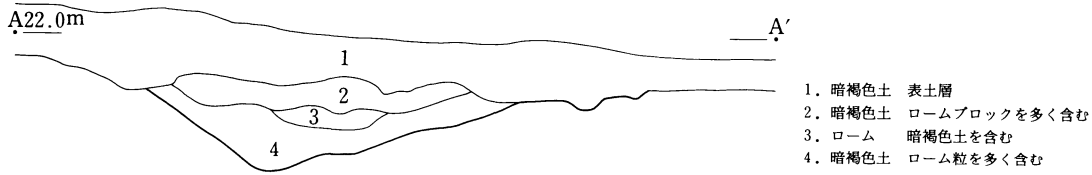
S K 22（第21図）調査区南東部の土坑群中に位置する土坑である。長さ1.6m、幅1.2mほどの不整形のプランで、深さは0.4mを測る。ピットと重複している。遺物は出土していない。

S K 23（第21図）調査区南東部の土坑群中に位置する土坑である。両側部に段状の掘込みを伴う。長さ3.0m、幅1.2m、深さ0.8mを測る。遺物は出土していない。

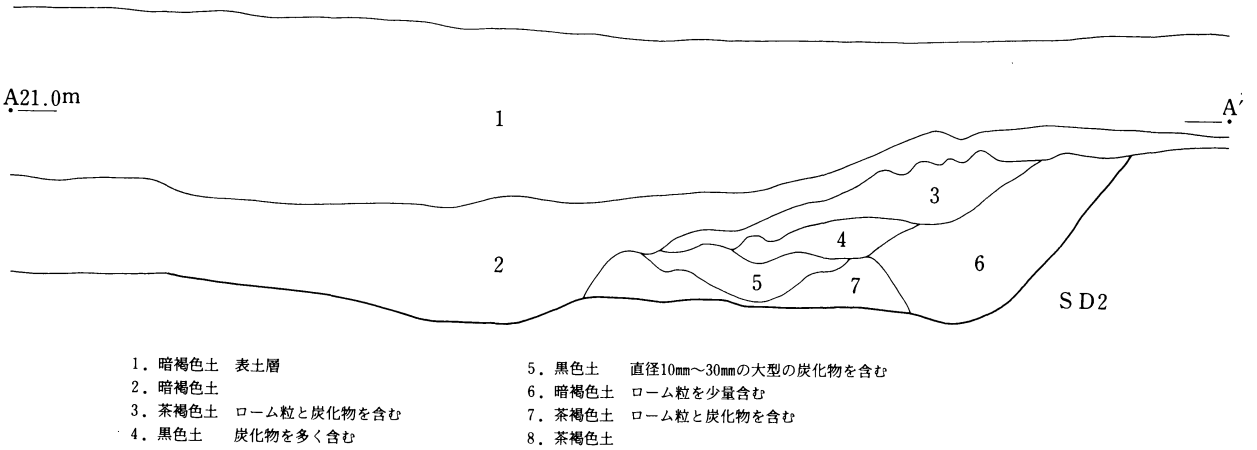
溝状遺構

S D 2（第18・24図、図版4）調査区南端に位置する西北西－東南東方向の溝状遺構である。東南東方向は調査区域外へ伸びている。西北西方向は次第に掘込みが浅くなり、約8m確認できたにとどまった。幅1.0～1.2m、深さ0.1m～0.2mを測る。また、S D 2の東側には、大きく方形に張り出した掘込みを伴っている。この一連の掘込みを境に南西部分の台地は削平されている。このS D 2は一段下がった平場との境界に位置しており、台地整形に伴う溝状遺構と考えられる。

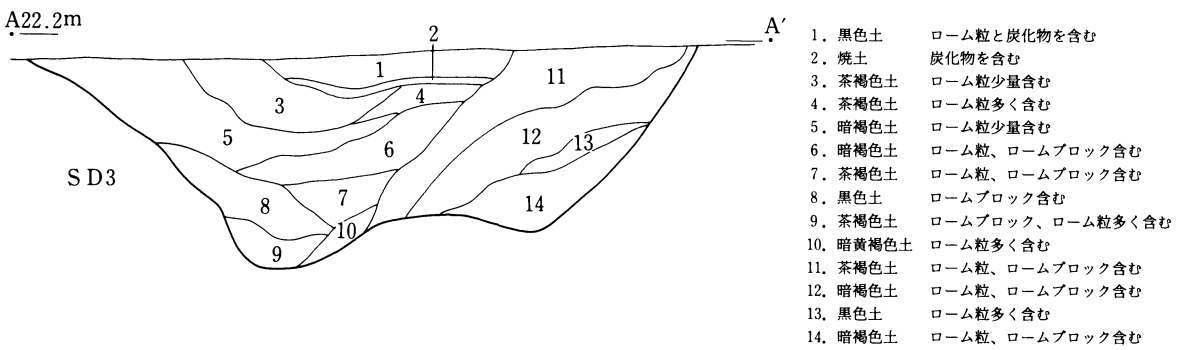
遺物（第25・26・28図、第2表、図版12・14）遺物は約1.5m程の範囲から集中して出土した。出土量は整



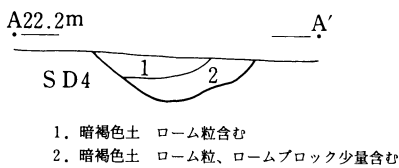
SD6



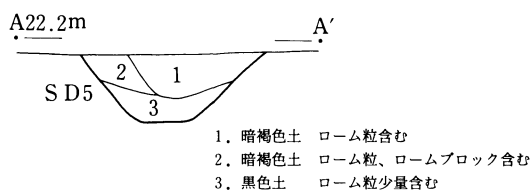
SD2



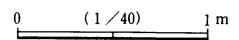
SD3



SD4

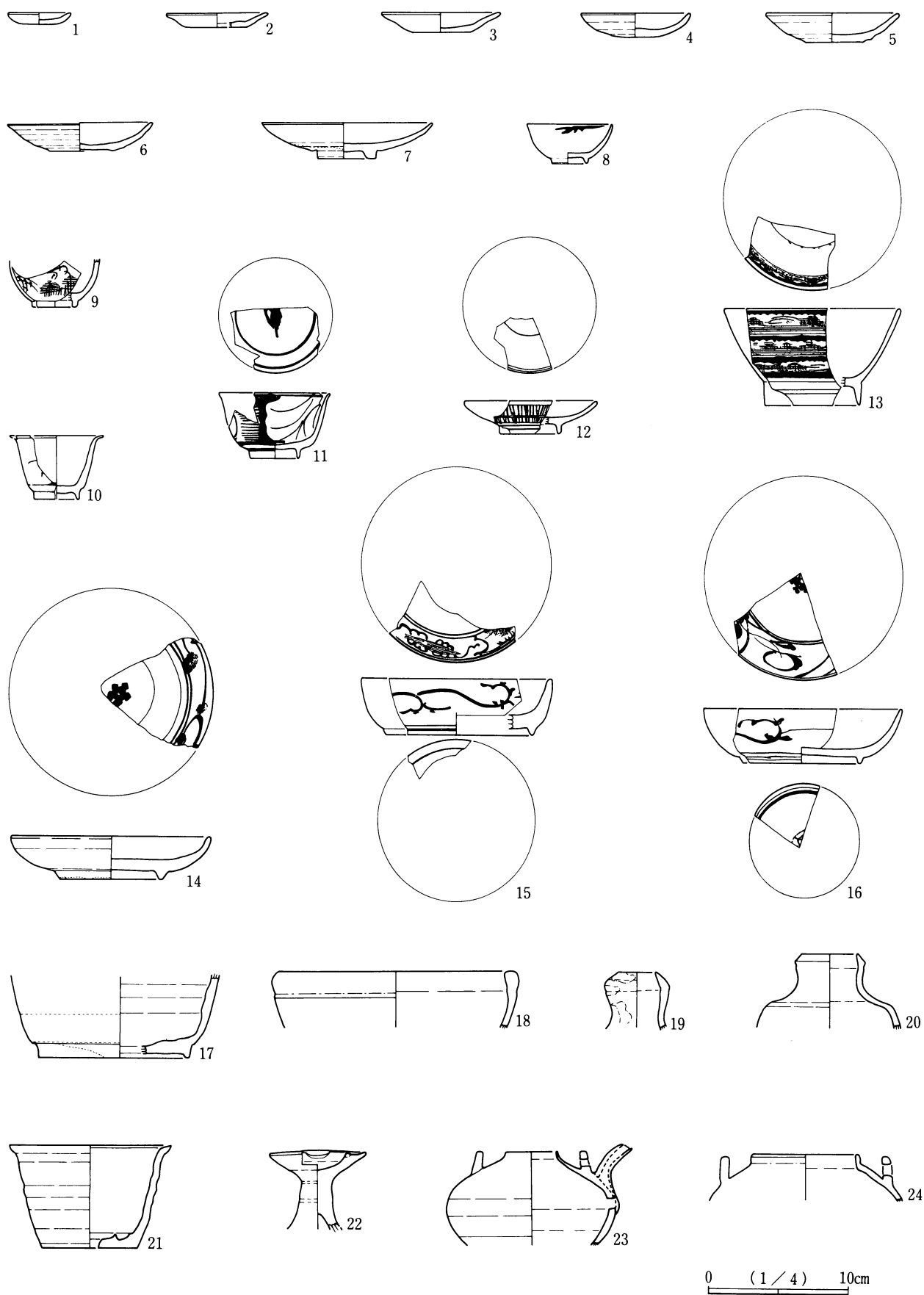


SD5

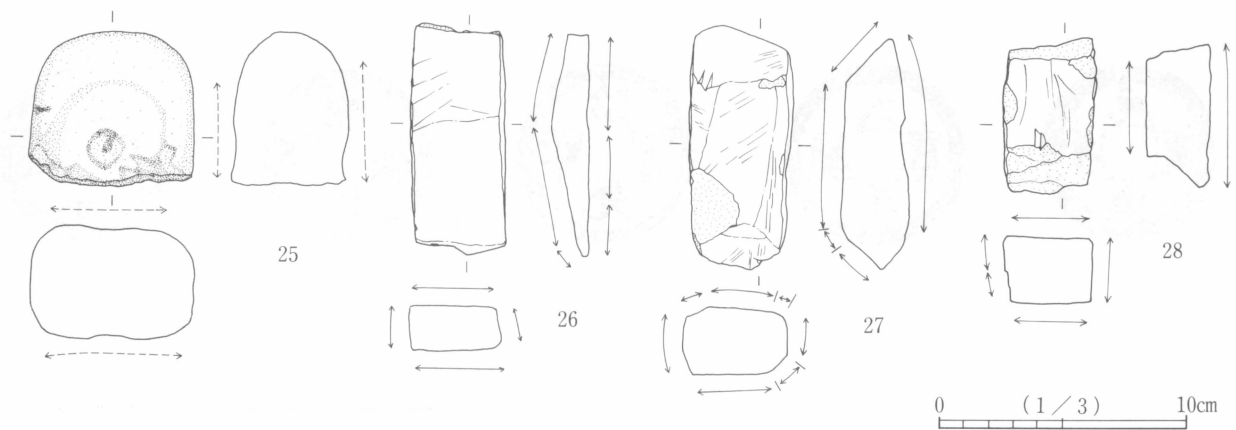


第24図 南側調査区溝状遺構

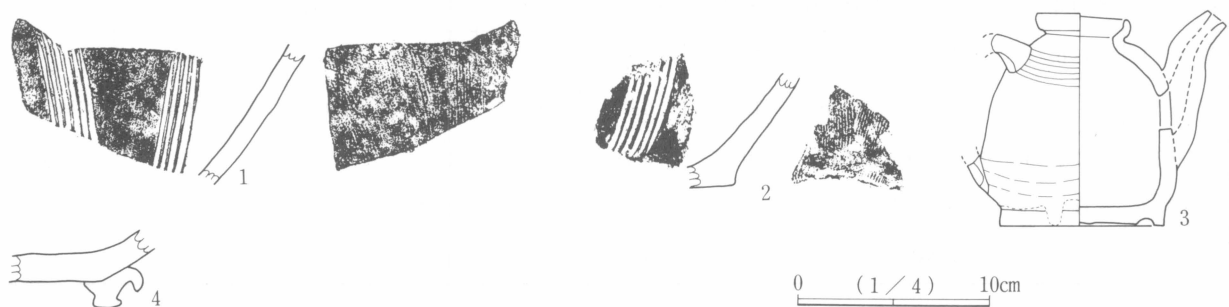
理箱約2箱分である。カワラケや播鉢、焙烙、灯明皿、植木鉢、皿、碗、急須などの土器・陶器類や、砥石や土人形、土錘など様々な遺物が出土した。1~3はカワラケ、4~6は鉄釉灯明皿の平皿、7は緑釉輪剝皿、8~11は染付盃、12は染付飯碗蓋、13は染付飯碗、14~16は染付皿、17は灰釉香炉、18は灰釉鉢、19と20は灰釉徳利、21は土師質植木鉢、22は施釉脚付土師質灯明皿、23は急須、24は銅緑釉土瓶である。25は縄文時代の変成岩製の窪み石である。26は砂岩製砥石、27と28は泥石製砥石である。28は被熱してい



第25图 SD2土器・陶器



第26図 SD2石製品



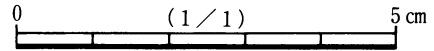
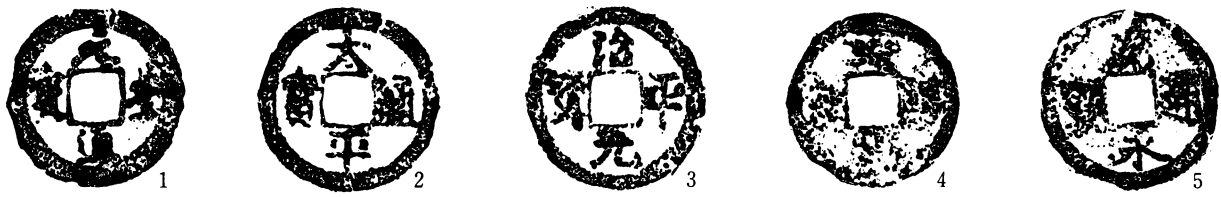
第27図 SD3土器・陶器

る。また、銭貨も2点出土している。第28図4は銭種は不明である。第28図5は寛永通宝である。

SD3 (第17・24図、図版3・4) 北西方向から南東方向へ走る直線の溝状遺構である。調査区を横切るように検出され、両方向が調査区域外へ延びている。そして複数の掘返しが確認できる。大きく見ると南側から北側へ若干ズレて掘返されている。また、掘返した北側の溝状遺構も少なくとも2回の掘返しが確認できる。北側の新しい溝は上幅2.5m、下幅は0.4m、深さ1.1mを測り、ややV字状に近い断面形である。それに対して南側の古い溝は下幅0.9m以上で、深さは若干浅く0.9mを測り、逆台形状の断面形が想定される。また、不規則ではあるが、新旧の溝の立上がり付近に多くのピットが見つまっている。直径20cm~40cm程の小規模なものが多いが、いずれも深さ50cm~80cmで、しっかりと掘り方である。ピットは溝状遺構の底面付近にはほとんど見られず、溝状遺構の立上がり部分付近にまとまって位置しており、SD3に伴うピット群の可能性もある。また、SD3には地下式墳や竪穴状遺構、土坑などが重複している。SD3と軸方向を一致するものもあるが、いずれもSD3との前後関係は不明である。このようにSD3は複数回掘返されており、長い期間機能していたと考えられる。ただし覆土は全体的にしまりに欠けており、道路などには積極的に利用された痕跡は認められない。

遺物 (第27図、図版13) 出土量は僅かである。1と2は釉掛けされていない播鉢である。両者とも播目の幅が2.1cmで、6条1組で引かれている。3は灰釉水注である。体部は丸味を持ち、肩部に櫛引きと思われる4条の沈線が巡らされている。口縁部はS字状に開いてから内湾していて、蓋を受ける形である。釉は高台付近まで掛けられて、さらに口縁部から注口部にかけて銅緑釉を薄く流し掛けられている。4は瀬戸美濃系の三足付きの大皿の底部である。

SD4 (第17・24図、図版3) SD3の約0.5m北側で、SD3とほぼ平行する溝状遺構である。上幅0.8



第28図 SD2・6銭貨

挿図番号	遺物番号	銭種	外縁外径	外縁内径	内郭外径	内郭内径	外縁厚	文字面厚	重量	鑄造年
第28図1	SD 6-1	元豊通寶	23.75	15.25	0.68	0.58	1.01	0.68	2.27	1078年(北宋)
第28図2	SD 6-2	太平通寶	24.48	19.25	0.72	0.59	1.26	0.76	2.13	976年~983年(北宋)
第28図3	SD 6-3	治平元寶	24.08	19.05	0.76	0.59	1.36	0.70	2.50	1064年~1067年(北宋)
第28図4	SD 2-213	不明	22.98	18.60	0.76	0.63	1.13	0.95	2.31	
第28図5	SD 2-327	寛永通寶	24.00	19.25	0.73	0.55	1.33	0.89	2.30	

単位=径・厚: mm、重量: g

第2表 銭貨計測表

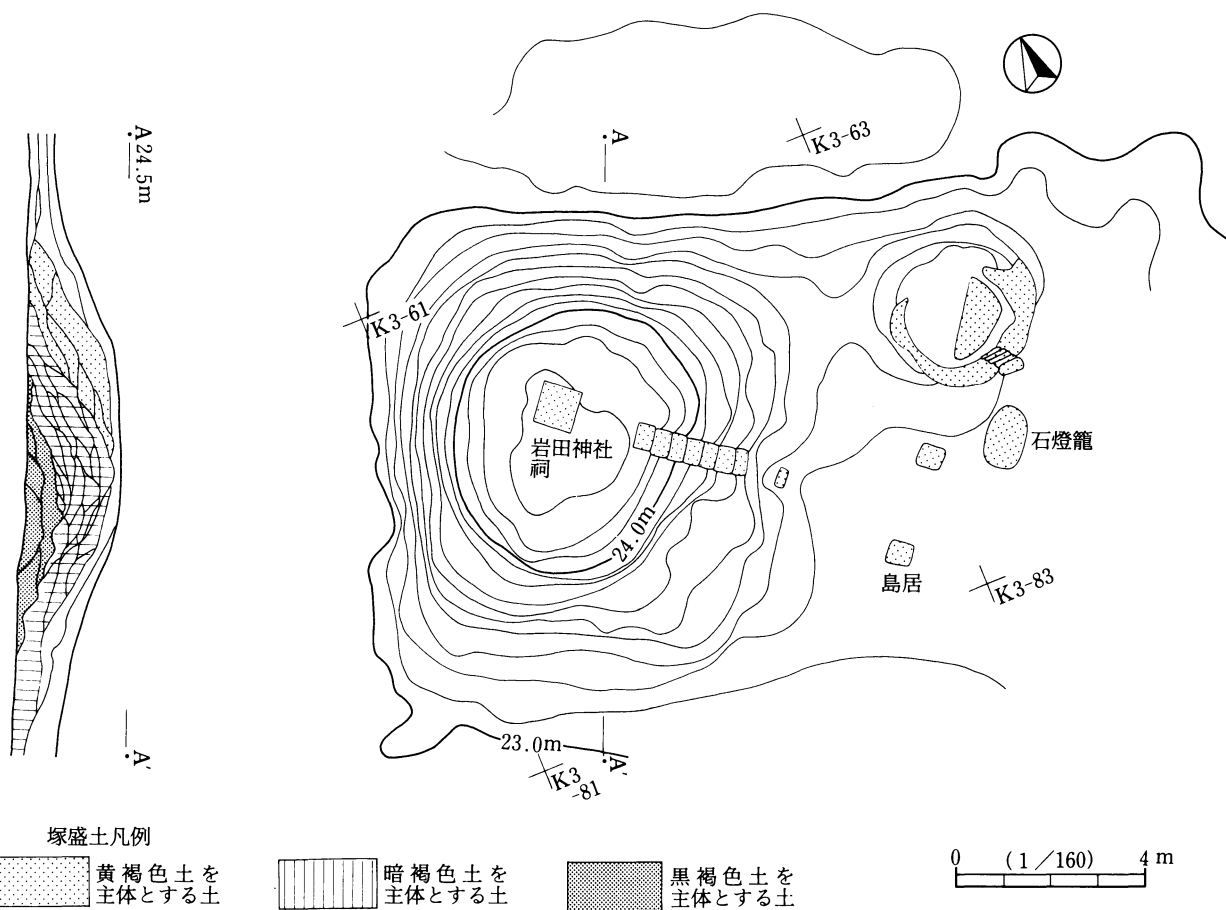
m、深さ0.2m程の断面丸底状の小規模なものである。調査区の東側については遺存状況が悪く、存在は確認できていない。

SD 5 (第17・24図、図版3) SD 4の北側にほぼ東西方向に伸びる直線状の溝状遺構である。約8m確認されたが、西側は調査区域外へ伸びている。東側は攪乱により不明である。上幅約1.0m、下幅約0.3m、深さ約0.3mの断面逆台形状を呈している。遺物は須恵質の甕の小片2点と、在地産の土器片3点、瀬戸美濃系の小皿の小片1点、砥石1点などが出土している。

SD 6 (第18・24図、図版4) 直角に折れ曲がる溝状遺構である。上幅1.9m~3.0m、深さ0.5mほどの断面ややV字状を呈している。西側は調査区域外へ伸びている。東側は攪乱のため不明である。SK 1~3と重複している。SK 3との前後関係は不明ながら、SK 1とSK 2については天井部が崩落した後、溝が掘り込まれている。SD 6周辺に地下式墳が集中する傾向がある。SK 1、2、4はそれぞれSD 6に沿って位置し、いずれも南側に竪坑が開口している。SK 5はSD 3が直角に折り曲がる内側である南側に位置している。なお、SD 3周辺を境にその南側はやや標高が下がっている。調査前の地形図においても、SD 3の内側がその北側に比べて標高が一段下がっている状況を読みとることが出来る。SD 3の内側において明確な台地整形は確認できなかったが、台地の肩部を利用してSD 3の南側の平場を一段下げている可能性が高い。

遺物(第28図、第2表、図版12) 1は溝の底面から、2と3はSK 3に接し覆土中から出土した。

塚(第29図、図版8) 一辺約8m、高さ約2mの方形塚である。SD 3が埋まった後、盛土されている。盛土は大きく3段階になされている。大きく造り足している可能性もある。ただし、遺物が出土しておらず、塚造成の年代は不明である。頂部に直径3.5m程の平坦面があり、そこに岩田家の屋敷神である岩田神



第29図 塚

社の祠がまつられている。祠の前面には参道に沿って石段と鳥居、石燈籠が造られている。

III ま と め

1 旧石器時代から奈良・平安時代について

小規模ながら旧石器時代の石器出土集中地点が1か所発見された。加地区遺跡群では北谷津第I遺跡や北谷津第II遺跡、若宮第II遺跡、若宮第I遺跡などにおいても旧石器時代の石器が発見されている。

縄文時代については、遺構は検出されなかったものの、北側調査区から早期から後期にかけての縄文土器が発見された。特に前期後半の浮島式・興津式土器についてはまとまった遺物が出土した。周辺遺跡ではこの時期前後の遺構が多く発見されている。黒浜式期の竪穴住居跡が調査区西500mの北谷津第II遺跡、調査区西約250mの北谷津第I遺跡、及び調査区の北側に接する八幡前遺跡C地点からも発見されている。興津式期の竪穴住居跡については調査区の北側に接する下屋敷遺跡から発見されている。このように調査区が位置する小台地上から前期黒浜式期、興津式期の遺構が点々と発見されている。こうした遺跡分布状況の中に今回の縄文土器出土集中地点を位置付けることができるが、特に北側に接する下屋敷遺跡との関係が注目される。

奈良・平安時代については、北側調査区で溝状遺構SD1が発見されたが、周辺遺跡からも同様の遺構が発見されている。下屋敷遺跡の1号溝はSD1の北北東約150mの延長上に位置している¹⁾。ほぼ南北方向の溝であるが、SD1同様にやや東に振れている。調査区内の標高差が約2mの斜面地で南から北へと緩く下っている。上幅約4.4m、深さ0.8~1.0mを測る。覆土中からは奈良時代後半から平安時代前葉の遺物が出土している。また、調査区の北約800mに位置する三輪野山第II遺跡でも複数の溝状遺構が発見され、奈良時代まで遡る道路跡も発見されている²⁾。南北方向の206号溝は幅1.6m~2.0m、深さは0.2m~0.4mで、底面はほぼ平坦である。本例のSD1と類似している。なお、SD1の想定延長上には多くの奈良・平安時代の集落が発見されている。SD1の北約150mの八幡前遺跡C地点では平安時代の竪穴住居跡4軒が、SD1の南南東約150mの地藏谷津遺跡では8世紀前半の竪穴住居跡4軒が、SD1の南南西約200mの若宮第I遺跡A地点からは平安時代初頭の竪穴住居跡2軒が、さらにSD1の南南西約300mの若宮第I遺跡B地点からも奈良・平安時代の竪穴住居跡2軒が発見されている。このようにSD1の想定南北延長上付近から、2軒~4軒の小規模にまとまった竪穴住居跡群が発見されている。本遺跡周辺の加地区遺跡群では、町畑遺跡が奈良・平安時代の拠点集落と考えられる。古墳時代後期から平安時代に続く大集落で、大型の掘立柱建物群や皇朝十二銭の「神功開寶」なども発見されている。それに対して若宮第I遺跡と若宮第II遺跡は部分的な発掘調査ながら、町畑遺跡と比べ竪穴住居跡の密度は低く、現時点ではSD1の想定南北延長上付近に竪穴住居跡が点在して発見されている。なお、SD1の北側想定延長上には奈良・平安時代の大集落の三輪野山遺跡群が、南側想定延長上には同様に奈良・平安時代の大集落の平和台遺跡が位置している。江戸川左岸の奈良・平安時代の拠点集落の分布は、台地端部に沿って北から三輪野山遺跡群、加地区遺跡群、平和台遺跡群が南北に並ぶ特徴がある。こうした中でSD1は集落をつなぐ作り道のひとつの可能性がある。

2 中近世

南側調査区では中近世の遺構群が多く発見された。遺構の性格と位置関係、時期差、主軸方向などによ

り、以下の4つの遺構群に分けることが可能である。

第1遺構群－調査区南東部の土坑群とSD2とSD5

第2遺構群－塚

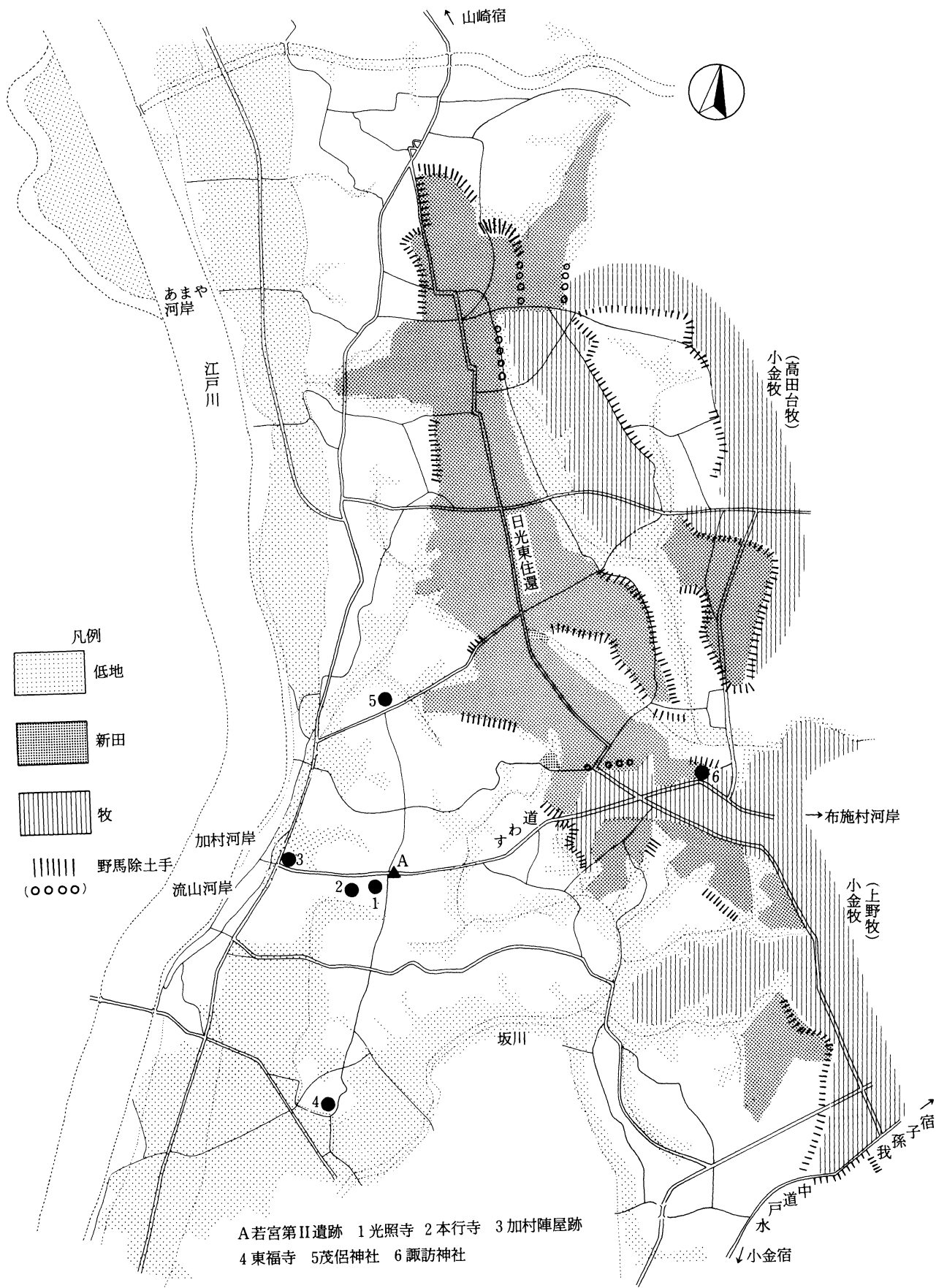
第3遺構群－SD3とSD4の溝状遺構

第4遺構群－SD6と地下式墳群

第1遺構群の土坑はSK8とSK9の複室構造の地下式墳、SK10～12の地下室、SK18とSK19の楕円形プランの土坑、SK20～23の長方形プランの土坑の4種類に分けられる。いずれの形態も貯蔵機能を有した土坑と考えられる。これらの土坑は同じ形態ごとにまとまって分布する傾向がある。そして、この土坑群の中心に位置するのがSE1の井戸跡である。SE1は近代まで隣接する岩田家で使用されていたもので、近世遺物に混じって近代の遺物も多く出土している。SE1に接して浅い溝状の落込みが認められ、その周囲に土坑群が分布する。この周辺からは近世中期以降の土器、陶磁器や、焙烙、播鉢、茶碗など日常雑器が多く出土している。これらの土坑群は近世中期以降の隣接する屋敷の貯蔵施設と井戸跡と考えられる。そして、この南側のSD2については、さらに南側の平場との境界の溝と考えられるが、また屋敷地の区画の役割を果たしていたとも考えられる。北側に位置するSD5についても、現在の地藏坂の道に沿っており、現在の岩田家の屋敷地の境界とほぼ一致しており、岩田家の屋敷地を区画する溝と考えられる。なお、現在の屋敷地の南側を東西に走る県道柏・流山線は昭和15年航空隊基地建設に伴ない新規に造られた道路で、それ以前は現在の地藏坂を通る「すわ道」が主要幹道として使われていた。なお、「すわ道」際の岩田家の屋敷地の西側には土手が巡っていたと伝えられ、SD5の北側についても「すわ道」との間がやや幅広い点から、土手が巡っていた可能性が高い。

第2遺構群の塚は、遺物が全く出土しておらず造営時期を特定できない。ただし、SD3が埋まった段階で塚が作られている。SD3からは近世初頭の遺物が検出され、それ以降の遺物は検出されていない。調査区南東の遺構群からは主に近世中期以降の遺物が出土しており、対照的である。SD3は近世中期には廃棄されていた可能性が高い。塚造成の年代の上限は近世中期である。なお、塚の上には大正15年の碑が奉られている点から、少なくともこの時期には塚は存在していたと考えられる。なお、現在塚の上には岩田神社の祠が奉られている³⁾。岩田家の出自は奈良県岩田郷(桜井市)で、柏市戸張に土着した後現地向へ転住し、現当主は41代目と伝えられている。また、加の岩田家からも、江戸川対岸の三輪野江に一族が転住している。岩田氏はその昔駒木の諏訪神社の神官高市氏と交誼関係があり、塚の上の祠は高市氏により奈良県の岩田神社から分社した社と伝えられている。以前はこの祠に三輪野江の岩田家も毎年正月参拝しており、この祠は一族結合の上で重要な役割を果たしていたと考えられる。三輪野江の分家以前に、塚の造成と祠の分社が遡る可能性が高い。なお、岩田神社の祠は西を向いてまつられているが、この方向は先祖の出自の奈良県岩田郷を向いていると伝えられている。

第3遺構群のSD3は近世初頭の遺物が出土している点から、この時期には機能していたと考えられる。SD3とSD4は現在の岩田家の屋敷地の中心を横断しており、少なくとも現在の岩田家成立以前に機能していたと考えられる。調査段階においては、SD3の覆土中から馬骨が出土しており、野馬除堀と考えられている。現在確認されている周辺の野馬除土手の分布は、近世中期の小金牧の絵図面とその多くが対応している⁴⁾。牧の境の谷津に面した台地端部や、近世初頭以降進められた牧内の新田開発地域の境付近に多くの野馬除土手が位置している(第30図)。今回のSD3はこれらの牧の範囲や野馬除土手の分布範囲か



第30図 流山市内の小金牧周辺図

らはやや離れて位置している。これは近世初頭以前段階のさらに広い牧の存在を示すものか、実際の野馬の被害がこの場所まで及んでいたことを示している可能性がある。近接する野馬除土手の事例は、加と三輪野山の境の若宮第II遺跡や、三輪野山と市野谷との境の八幡前遺跡でもその存在が指摘されている。SD3については南側からの土砂の堆積が推測され、南側に土手が存在していた可能性がある。つまりSD3は南側の谷津田や畑を、北側からの野馬の進入被害から守った可能性がある。またSD3は台地上に溜まった悪水の廃水路の可能性も考えられる。江戸川上流左岸の新田開発以前は、流山集落の東側台地上に降った雨水や悪水が流山集落を襲ったため、流山部落への悪水進入を締め切るため、流山村と加村との境の諏訪道の嵩上げなどがなされている⁵⁾。また、加村でも地内の悪水の処理や、三輪野山村との境の道を堤にして、防水遮断する必要があったとされている。SD3は東西からの谷頭を結ぶ、台地が一番狭まった地点に位置しており、こうした台地上の悪水処理に関わる可能性もある。SD3の南東側延長上は坂川方面の谷であり、台地上の悪水を坂川方向に一括して処理する機能を想定することも可能である。

第4遺構群のSK1やSD6の出土遺物は中世末から近世初頭まで遡る遺物であり、第4遺構群の時期を考える上で注目される。また、地下式墳は第1遺構群の地下式墳と異なり、いずれも地下式単室構造である。また、北宋銭や骨片が出土しており、第1遺構群の複室構造の地下式墳とは異なる性格を想定することが可能である。第4遺構群は、県内の中世末から近世初頭の台地整形区画を伴う墓所の事例と共通する点が多く、同様の機能が推測される。なお、この地点は地理的には江戸川左岸からの谷津と、坂川からの谷津との分水界に当たる。この分水界付近には日蓮宗の本行寺と浄土宗の光照寺の二つの寺院が存在している。本行寺は延慶元(1308)年に、光照寺は天正20年(1592)年に開基されたと伝えられている。光照寺からは元応2(1320)年～永正14(1517)年の紀年銘をもつ板碑が発見されている⁶⁾。また、この地点は東西に走る県道柏・流山線と、南北に走る県道新川・流山線と二つの主要幹道が交差する辻に当たる。県道柏・流山線のルートは、通称「すわ道」と呼ばれ、武蔵・上野・下野・常陸などにも信仰圏が広がっていた駒木の諏訪神社への参詣道でもある。近世においては、江戸川の加河岸・流山河岸と利根川の布施河岸との間の河岸間道として重要な陸路であった⁷⁾。また、中世においても八木郷を東西に横断し、本行寺や正中元(1324)年に開基されたと伝えられる本妙寺がこのルート沿いに位置している。一方県道新川・南流山線の南北ルートも、道路に沿って多くの寺院や神社が位置している。光照寺や元中元(1384)年開基の本覚寺などが道沿いに位置し、このほかの近世以前の由緒をもつ寺社についても、この道路に参道を向けて位置するものが多く、この南北ルートも近世以前に遡る可能性が高い。また、この地点は現在の加と市野谷の字境であり、近世の加村と市野谷村との村境でもある。また、中世にあつては、坂川水系の谷津を中心に展開した八木郷の端にあたる。地形的には分水界であり、歴史的には2本の主要幹道が交差する辻であり、村境であるこの地点から、中世末から近世初頭に遡る墓所が発見された点が注目される。なお、調査地点に接した坂道は通称「地藏坂」と呼ばれ、市野谷から加へて上り始める箇所に地藏菩薩と馬頭観音が以前まつられていた。⁸⁾

注1 下屋敷遺跡調査会 1986『千葉県流山市下屋敷遺跡発掘調査報告書』

2 財団法人千葉県文化財センター 1996『主要地方道松戸野田線埋蔵文化財調査報告書－流山市南割遺跡・上貝塚第I遺跡・上貝塚貝塚・下花輪第遺跡・三輪野山第II遺跡』

3 流山市立博物館 1993『流山の屋敷神』

- 4 川根正教 1983「付編 流山市における小金牧の範囲について」『千葉県流山市向原野馬土手』流山市教育委員会
流山市教育委員会 1989『流山のむかし』
松下邦夫 1996「近世小金牧の実測図」『流山市史研究』第13号
- 5 松下邦夫 1985「近世流山村の成立について」『流山市史研究』第3号
- 6 流山市立博物館 1987『流山の石仏』
- 7 松下明弘 1993「流山の河岸について（1）」『流山市史研究』第10号
- 8 流山市立博物館 1995『流山の道』
- 9 第30図は、流山市教育委員会 1989『流山のむかし』の図「流山の小金牧周辺」より一部加筆再トレースして転載させていただいた。

写真図版



調査風景（北側調査区）



調査風景（南側調査区）



調査風景（北側調査区）



土層断面 (D 3 グリッド)



第1ブロック



縄文土器出土集中地点 (B 2 グリッド)

S K14



S D1



S D3、4、5





S D3



S D6



S D2



SK1



SK1



SK2



SK2



SK4



SK4



SK6



SK6



SK8



SK8



SK10



SK10



SK12



SK16、17

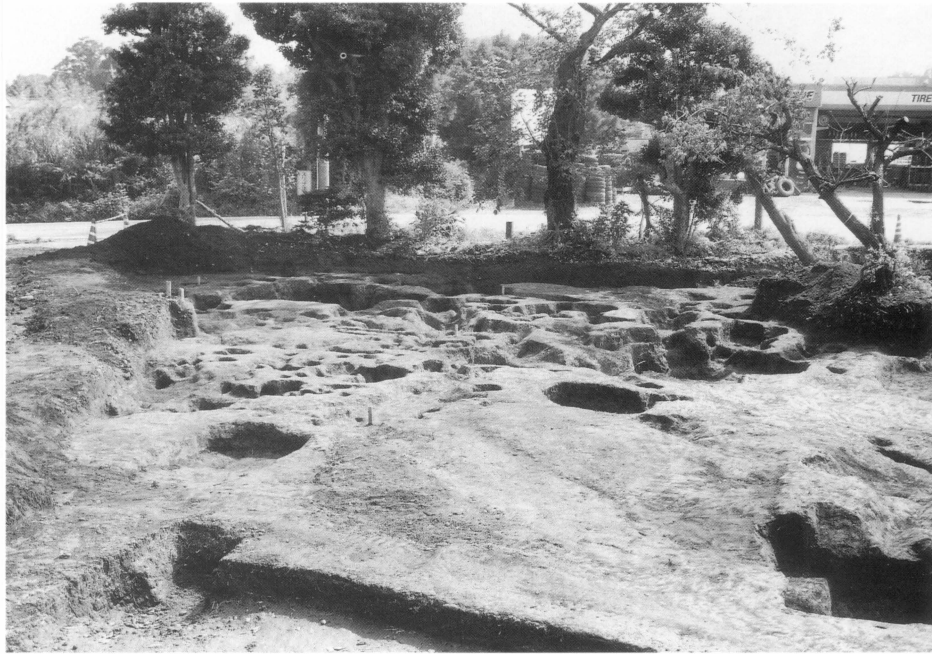


SK16

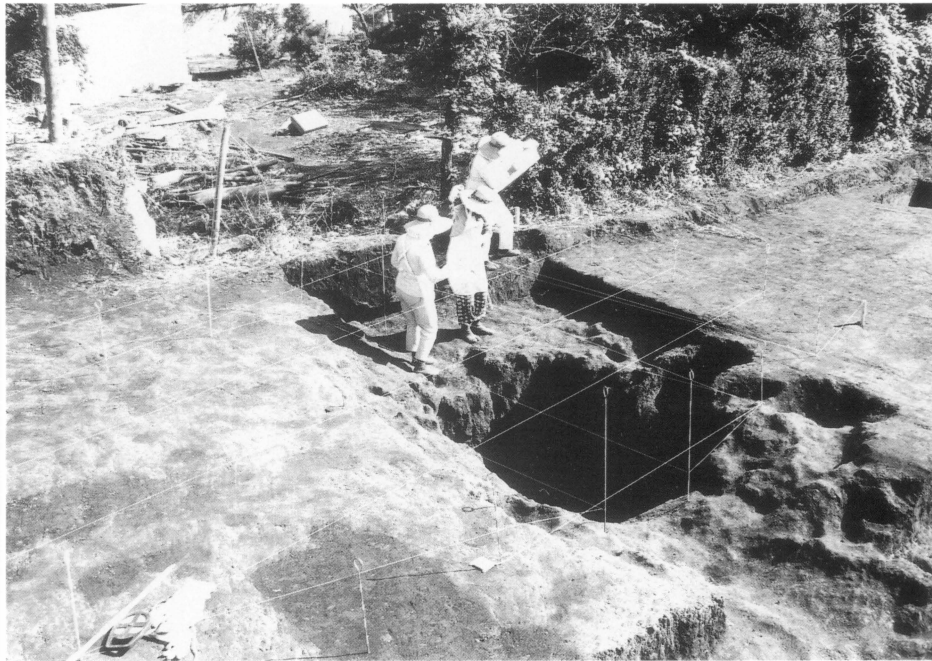


SK17

南側調査区南東部分の土坑群



調査風景（地下式墳）



調査風景（塚）





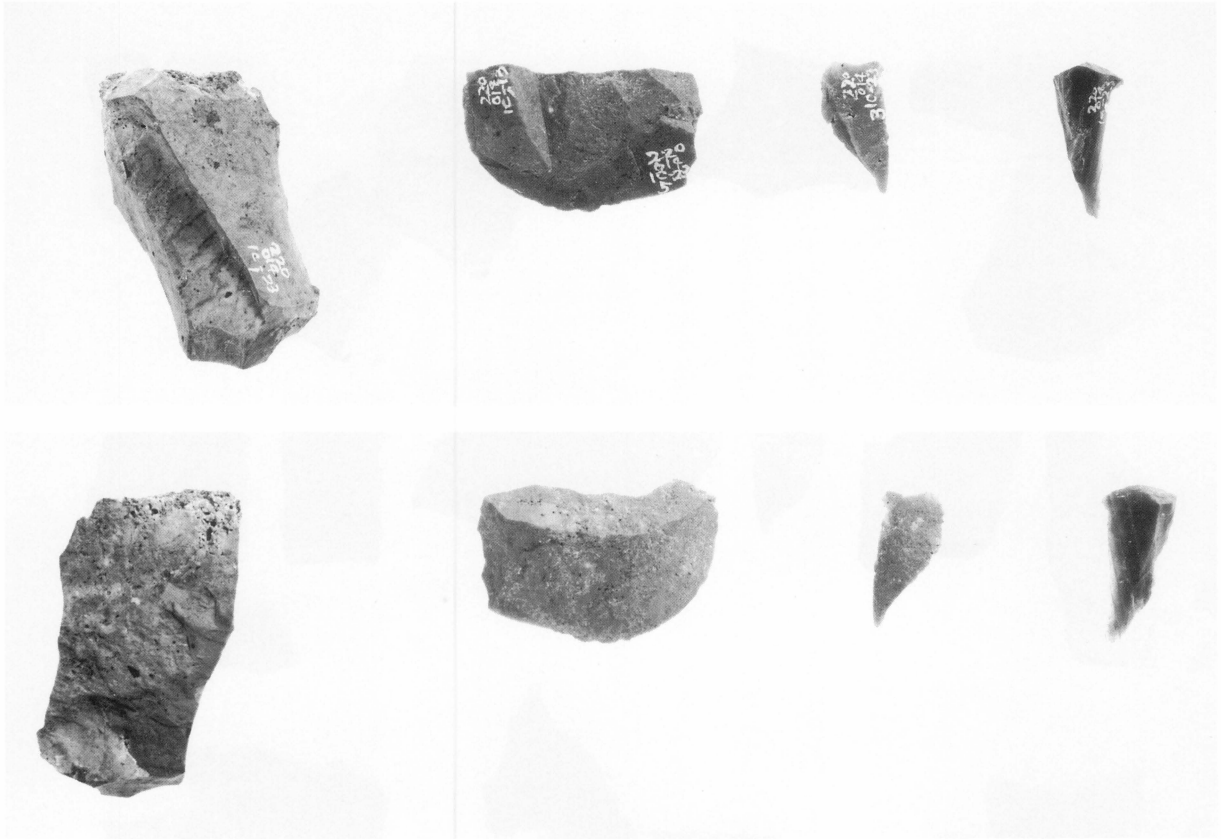
塚全景



塚断面



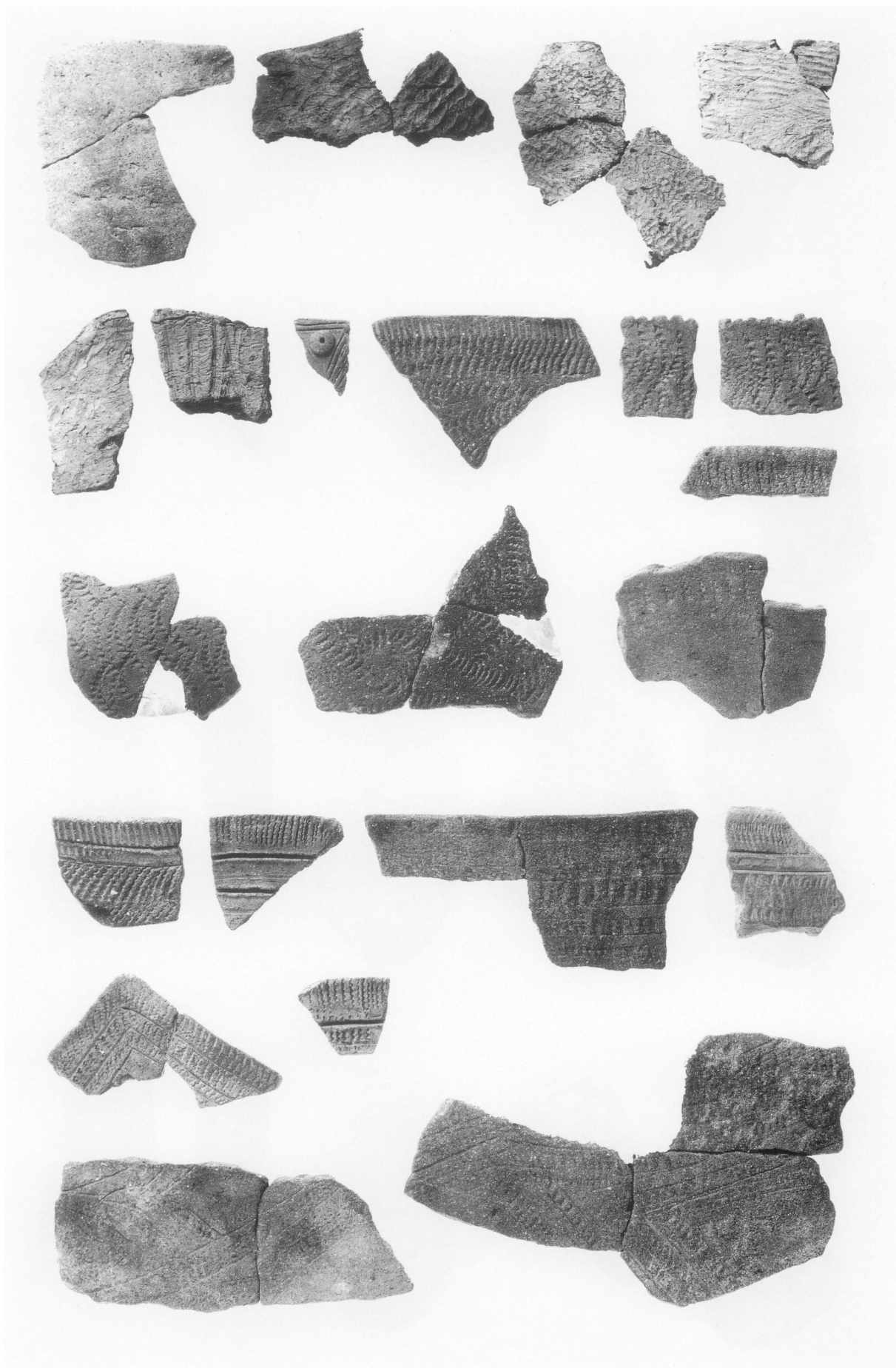
塚とSD3



第1ブロック石器



縄文時代石器



縄文土器(1)



繩文土器(2)



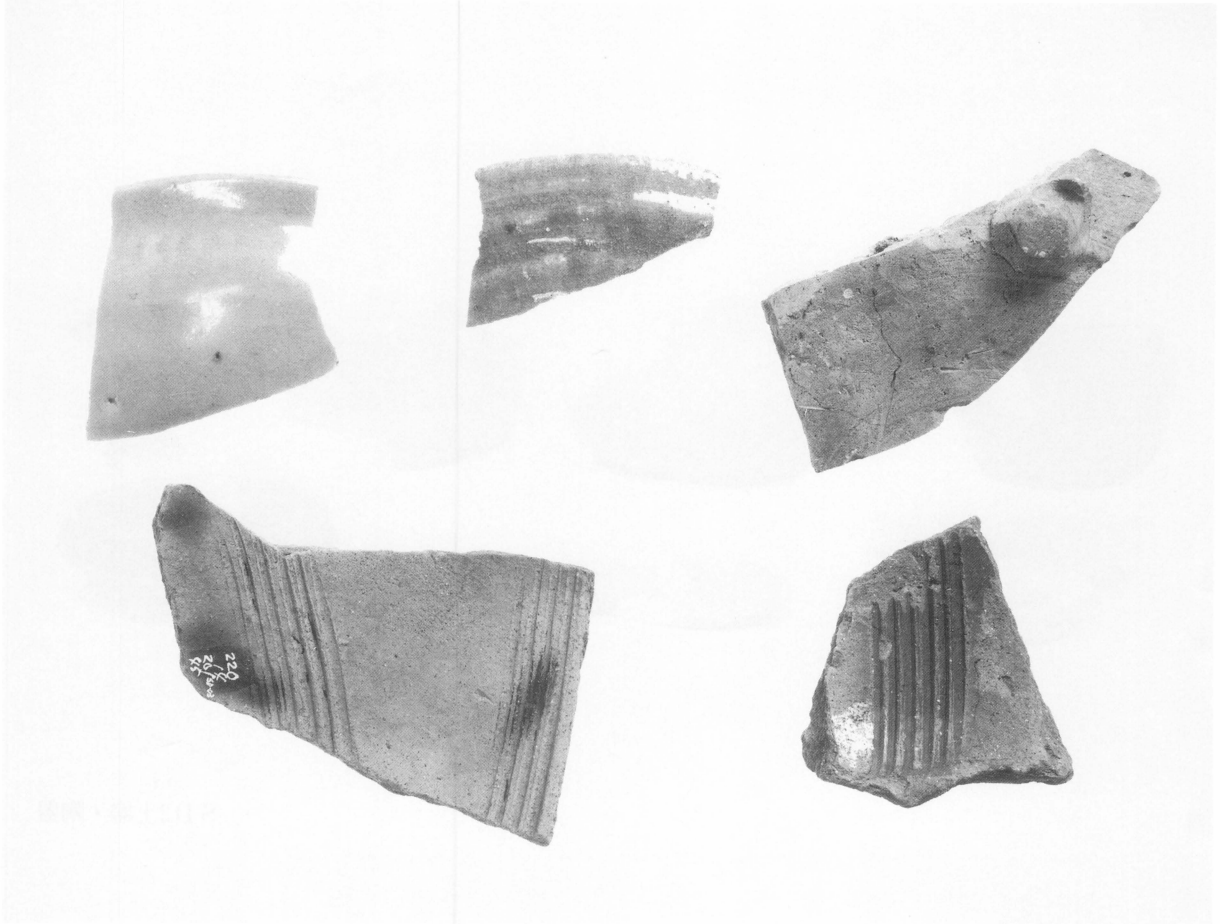
繩文土器(3)



繩文時代土製品・石器



S D2、6錢貨



SK I、SD3土器・陶磁器



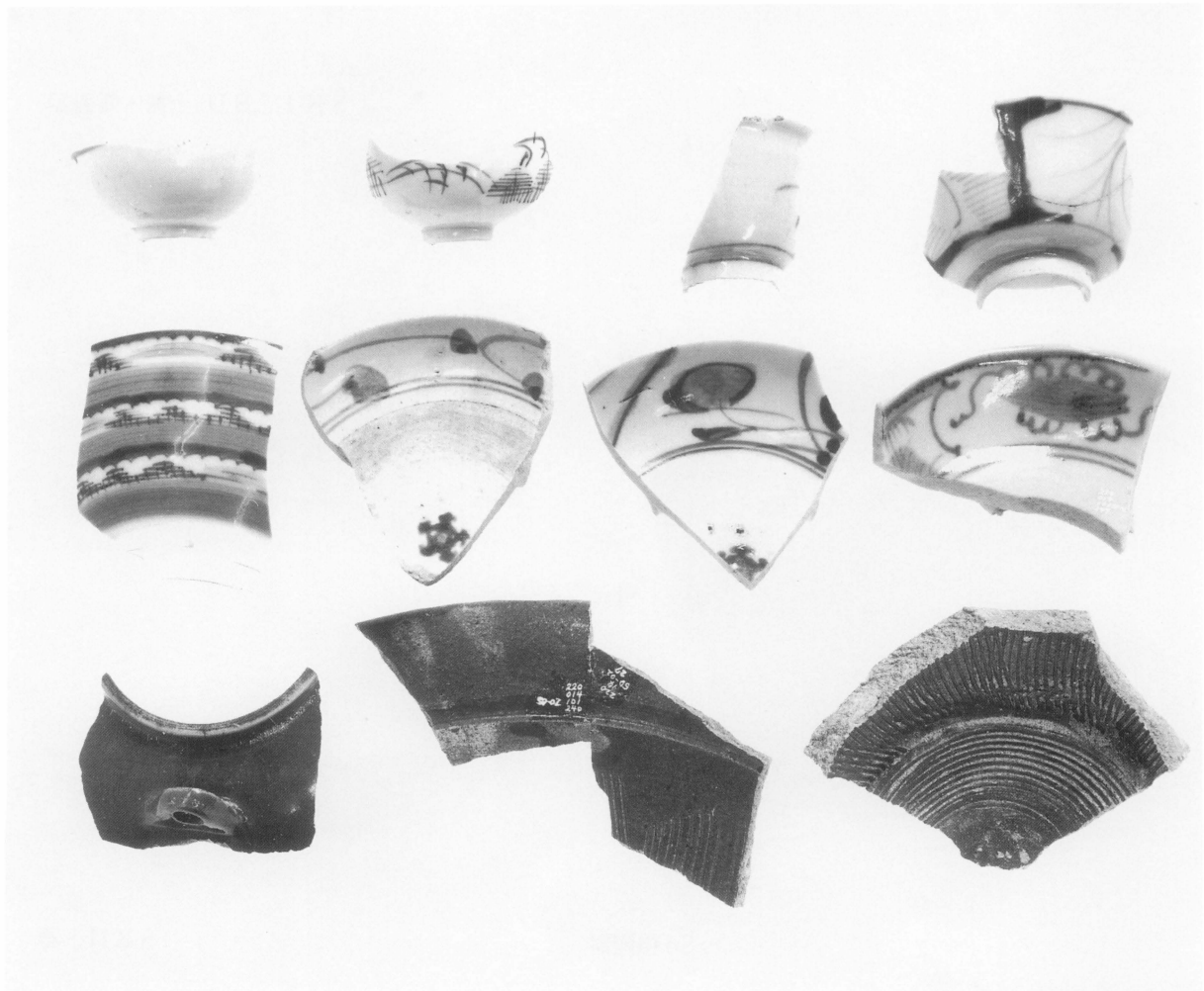
SD3陶器



SK11土器



S D2土器・陶器



S D2土器・陶器

報 告 書 抄 録

ふりがな	ながれやましわかみやだいIIいせき							
書名	流山市若宮第II遺跡							
副書名	都市計画道路3・3・2号線(新川南流山線)埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第296集							
編著者名	糸原 清							
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター							
所在地	〒284 千葉県四街道市鹿渡809-2 Tel 043-422-8811							
発行年月日	西暦 1997年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
わかみやだいIIいせき 若宮第II遺跡	ちばけんながれやまし 千葉県流山市加 531ほか	220	014	35度 51分 30秒	139度 54分 55秒	19900801～ 19901031 19910701～ 19910731 19910801～ 19910828 19960201～ 19960209	3,440m ² 928m ² 700m ² 210.2m ²	道路建設に 伴う事前調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
若宮第II遺跡	包蔵地	旧石器 縄文	遺物集中地点 遺物集中地点 陥穴 溝状遺構 溝状遺構 地下式墳 土坑	1 1 1 1 5 7 15	剥片 縄文土器早期～後期 石斧 須恵器 陶器、土器、古銭			
	塚	近世	塚	1				

千葉県文化財センター調査報告第296集

流山市若宮第II遺跡

都市計画道路3・3・2号線（新川南流山線）埋蔵文化財調査報告書

平成9年3月31日発行

編	集	財団法人	千葉県文化財センター
発	行	千	葉
		県	都
		市	部
			千葉県中央区市場町1-1
		財団法人	千葉県文化財センター
			四街道市鹿渡809-2
印	刷	株式会社	弘
			文
			社
			市川市市川南2-7-2
